

二次元ドリームノベルズ

18
未満



サウダーククラップス! 「ボーコ」

THUNDER CLAPS! REBORN ピースキーパー

羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章
サンダークラブス
水着回!
スラムス・ツイゾー 004

第二章
エクストリーム!
020

第三章
スターサンダーの
秘密が明らかに!
オリゾン・リビールド 044

第四章
牝奴隷と
巨獣競ショー
068

第五章
牝奴隷肛悦レース
096

第六章
牝奴隷に咲く
淫らな花園
110

第七章
黒い宇宙
ブラックマルチバース 139

ローズデバイス

Rose device

「サンダークラブス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼い
ころに重傷を負い、体内にナノマ
シンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着
して闘う。



オセロット

Ocelot

「サンダークラブス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美女。
南米の自然の精霊たちに認められ
たシャーマンで、精霊の力を宿し
てジャガーの獣人に変身して魔法
を使う。

バドリス・オル

スターサンダーの異母兄。とある
事情で妹を恨んでおり、復讐する
ために地球へやってきた。

スターサンダー Star thunder

スーパーヒーローチーム
「サンダークラブス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。



フレア

Flare

「サンダークラブス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ターに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

サンダークラブス! リボーン
CHARACTERS エスキパー









目次

- 第一章 サンダークラブス水着回！
第二章 エクストリーム！
- 第三章 スターサンダーの秘密が明らかに！
- 第四章 北政謙と巨獣怪獣ショー
- 第五章 北政謙と紅いドレス
- 第六章 北政謙に魅く謎だらけの花園
- 第七章 黒い宇宙

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンD.C.へ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が
生身で受け止め、生身を宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、宇宙からもつてくると集まった記者たちへほがらかに
笑って、僕は子供のころから『超能力者』と呼ばれていた、と語った。

それからスーパーオビートは鮮やかな赤いコスチュームをまとい、赤いケープをひるがえして、倒れかかったビルを持ち上げ、
墜落する飛行機を支え、海底に沈んだ潜水艇を引き揚げた。

さらに多数の犯罪者を倒し、ギャングが放った銃弾の雨も楯で跳ね返し、テロリストが仕掛けた爆火にも冷静にも耐えて、
悪党を逮捕して法の裁きのもとへ送った。

最初に世に現れた超人スーパーオビートに刺激されたのが、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれついで超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは悪志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物。はては異星人に別次元人
までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオビートと呼んだ。

オビートたちのある者は平凡に暮らした。
ある者は特別な能力を駆使した。

そして多くのオビートたちが、始祖スーパーオビートにならって、犯罪や事故から人々を助け、天災から人々を救うスーパービ
ローとして活躍している。

鈴堂麗、日向輝、柳イザベラ華果。北原静子。四人も各々異なる理由で、様々な超能力を得たオビート。

麗はスターサンダー。
華果はオセロット。

静子はロースデバイス。
と、ヒーローネームを名乗り、スターサンダーをリーダーとしてサンダークラブスというヒーローチームを結成している。

世にデビューしてから間もないが、人気の高い新進鋭のチームだ。
とはいえず、スーパーヒーローにも善戦の生活はある。正義と平和を護るためには、ときに肉体と精神をくつろがせることも必要だ。

今日は昼間から、四人そろって鎌倉区にあるスーパー銭湯に来ていた。西武池袋線沿線に住居兼秘密基地を置くサンダークラブ
スにとっては、手近にあるありがたいリラクスの場所。四人の間ではサンダークラブスリラクゼーション基地と勝手に呼んでい
る。

スーパー銭湯には男性用と女性用の二つの大浴場の他に、男女共用の屋内温水プールがある。プールでは水着の着用がルールで、サ
ンダークラブスの四人も女性用着替え室の互いに見えない位置で着替えていた。

今日はリーダーの麗の提案で、別々に買った水着をプールで披露しよう計画だ。
大きなゼムタールを胸を隠した四人がプールサイドに集まると、互いを見つめ合い、探り合い、審判する。

わずかに浴槽の後、広い屋外プールに驚々と声が高鳴った。平日の昼間なのでまだ少ない客たちが顔を向けてくる。
「ベルが一垂目ッ！」

柳イザベラ華果は、チーム内ではミルネームの愛称のベルと呼ばれている。ベルは南アメリカで生まれ育った白人。短い髪に緑
色だった裸けた顔は、ネコ科の足跡を思わせる鋭さと愛嬌が同居している。

チャリテイイベントに出演したスーパーヒーローが、マントをハサリと背後へ跳ね上げるように、ベルが右手でタオルを派手にはた
けた。

現れたベルの白裸けた身体は、スピードを纏うアスリートのようにしなやかで力強い。胸と尻は巨乳豊胸というにはやや小さい
が、引きしまった肉体と美しいバランスを構成した。

ジャンルで育んだ洗練たる健康美の肉体を飾るのは、肩紐のないチューブトップのビキニ水着。
普段から動物柄をプリントした服を好むベルは、ビキニも明るい黄色の地に「キューキニア鳥に生息する極楽鳥をちりばめている。
」という、この極楽鳥の模様。あちこち探して見つけたんだよ。ほらほらほらッ！」

ベルは両腕を後頭部にあわせて、胸をつんと突き出し、腰を振り、サンバのリズムでジャンル鳥の鳥を盛大に踊らせた。存在しない
陽気な音楽が聞こえそうな女性の運動に乗せられて、プールの男たちから、おおっ、と歓声が上がる。

「ああっ。次にお披露目するのは焼かぬ！ 静かぬ！」
ベルの胸を受け、輝と静子は顔を見合わせ、アイコンタクトして、同時にタオルをかけた。

日向輝は二十歳前後に見える。短い髪に、凛とした美貌。サンダークラブスのなかでは一番の長身で、女の魅力とたくましさも兼
ね備えた肉体に、二重目に豊かなバストサイズを誇っている。

北原静子は十代後半だが、小柄で華やかな身体つき。可憐で愛らしい美貌にも、肉体にも、また少女の面影を残している。胸の小さく
みはまた小さく、尻も熟すにはまだ早い。

対照的な容姿の輝と静子だが、水着は同じデザインだった。純白のワンピース水着。下半身はローレックで、二人のサイズの違う尻
と下腹部をしっかりと保持している。

水のほした空気を引き抜いて、ベルの怒声がほとほとした。
「二人いっしょに水着を買いに行つたなァ！ 別々に買うと約束したのに！」

「いやあ、それはまたまた水着売り場で静子と出会うちゃってッ！」
「そうなんです。なんとなくおそろいになっちゃってッ！」

「卑怯だ！ それでも」
ベルが周囲に聞こえないように声を低めて、二人に顔を近づける。

「正義のヒーローか」

静子も小さい声で言い返した。
「偉大なヒーロー、ミスター・アンフェアは言っています。『ヒーローが獲るのは正義という言葉でなく人間だ。人命を護るためにはどんな手段なこともする』と」

ミスター・アンフェアは日本の最も初期に現れたスーパーヒーローだ。誘拐・拉致・監禁・人質を取つての立てこもり等の事件において、縦横無限の策略で犯人を翻弄して、数知れない被害者を救出してきた。

ベルが舌届がかった困惑顔で、大げさに肩をすくめて見せる。「純情可愛たらた静が、いつの間にか腫れちまってる。こんなことなら、ポクが持つてる本場のブラシリアンピキニを焼に渡せばよかったよ。焼の立派なプロシオンならよく似合うから」

ベルの瞳が輝くのを見て、燦は苦笑する。
「涙されても、そういうのは絶対に替ないから」

「それじゃあ、麗ちゃんの水着を見せてもらおう。まっとうさうしよう。18歳かも」
「麗は常識人だよ。ちゃんと公共のプールの常識をわきまえてる」

ベルと燦の言葉を声援して、麗は孔雀が美しい尾羽を広げるようにタオルを持つ両手を開いた。
鈴宮麗は二十代後半、長い黒髪を頭の上にとまどめて、大人らしい端正で聡明な美貌を少し上気させている。

肉体は色白、むっちりとした熟していた。豊満な乳房は四人の中では最も大きく、自重でやや位置が下がっているのが艶めかしい。ウエストのゆるやかなくびれの下には、みっちり肉のつまった尻が突っついている。さらに太腿もむちむちだ。

大人の女の魅力を凝縮したような女性を包んでいるのは、紺色のスクール水着。丁寧な縫製の白い布には、「匿名」とサインペンで手書きしてある。

目の前で見ているチームメイトの三人だけでなく、プール中の男女が唖然として声を失った。豊満な乳房も尻肉もきちんと水着の厚手の生地内に納まり、窮屈な感じはしない。既製品のスクール水着を無理やり着込んでいるのではなく、わざわざ自分の肉体に色わせて製作したものだにわかる。

数秒後に、燦が口に出した。
「ど、どうしてスクール水着!? 大人はスクール水着を着ないことは、ちゃんと知っているさう」

「麗はかなりうっとりとした表情に、艶然と笑みを浮かべた。
「もちろん、知っているわ。知識としてね。でも地球文化の研究者として、知識だけでなく、スクール水着を体験しておきたかったのよ。これががフィールドワーク」

学者らしい言葉を口にしたながら、燦は三人が見つめる麗の瞳はねっとり潤んで、小鼻が少し広がっている。多数の人々の前でスクール水着姿を披露すること、歓喜を帯びているのは明らかだ。
「さあ、プールを楽しみましょう」

麗は手にしたタオルを近くの壁のバーにかける。ランウェイを闊歩するモデルのごとく艶爽とプールサイドを横切り、温水プールへと近づいてく。彼女の視線の集中放火を浴びながら、優雅な動作で温水に入った。

「麗らしいといえ麗らしいね。わたしたちの中で一番常識を知っているのは麗だけよ。平気で常識を無視する」
「あたしは常識的な人生を送ってきたとは言えないから、常識にはあまり自信がないです」

それを言ったら、ポクは四人とも普通の人生を送っていないよ。そもそも常識のある人間は「三人は一段と声を低くして、同じことを言い合った。
「スーパーヒーローには知らない」

笑い合ふ二人に、麗が温水の中から手を振った。
「早く遊びましょう。いつ呼び出されるのか、わからないんだから」

ひととき寄り添んだプールから女性用大浴場へ移った四人は、水着を脱ぎ、身体を洗って、中庭に面した天然温泉露天風呂にそろうって浸った。

緑の庭木にかまれた広い浴槽は、茶色い湯をなみなみとたたえている。地下一キロ以上の深さから汲み上げたナトリウム・塩化物強塩温泉で、大層に地中に閉じこめられた海水に様々な成分が溶け込んだもの。

麗は頭にたんだタオルを垂せて、茶色い湯面に豊かな乳房を二つの島のように浮かせて、温泉の中に白い裸身を長々と伸ばした。弛緩した美貌から、ゆるゆると喜声があふれる。

「はあ〜〜あ、極楽楽々〜〜さう。はあ、ピパノノン」
思い思いに湯船でくつろぐ二人が同時に言った。
「あつさんくさいなあ」

「ひほのんのん?」
「ひほのんのん?」
「ひほのんのん、てなんの呪文?」

麗はゆるんだ顔に自信をたっぷり浮かべる。
「日本では、温泉に入ったら、極楽楽々ピパノノンと言つのが伝統なのよ」

「えっ、さうなの?」
「あたしは聞いたことがない気がするんですけど……」

「ポクは南米育ちだし」
やはり日本の伝統と言われると、少々自信がない。地球の文化研究と称して趣味に走った雑学を講べている麗が一番の物知りだ。
「まあまあ、細かいことは気にしないで、のんびりリラックスしましょう」

しかし、そうはいかなかった。
麗、ベル、燦の耳の穴に入れている通信機から、同時に愛らしい少女の声が聞こえた。静子だけは特別な脳が直接電波を受信して、声に変換する。

「小籠光」です。警察から救護要請が来しました。緊急度、重要度、ともにSクラスです。異力団同士の抗争で、敵対する数人のオビート組織が能力を使って、あたりがまわす暴れています」

リトルボルトは、サンダークラップスの基地を修理するコンピュータに与えた人格だ。

「場所がわたくしがナビゲートします。急いでください！」

四人はうずまきまことにもせず、湯船からげんこつと立ち上がり、ベタベタと目を立てる急足で大浴場を横切り、他の客を驚かせる猛烈なスピードで私服を着た。外の駐車場に停めた白いワゴン車の荷物のドアを開けて、全員が座席ではなく荷台に乗りこむ。

麗は指先で首に巻いたチョーカーに触れた。麗星の技術が発動して、赤いスーツとスカート、ブラジャーとショーツ、靴下とパンフスガ微粒子に分解されて、チョーカーに吸収された。

入れ替わりにチョーカーから新たな物質が噴出して、一米まじりぬるの液体の表面にコチンクされる。物質は瞬時に凝固して、豊満な女性に纏く密着するスターサンダーのヒーロコスチュームになった。

スターサンダーのコスチュームは、真紅のレオタード型のボディーツ。アクセントとして青い縞縞の模様が走っている。身体の前

面は、胸の中心からへその下まで切れこみがあり、豊かな巨乳の半分となめらかな腹の肌をあらわにする。

両脇には膝下までの赤いブーツ。

顔には同じ色のアイマスク。

やたらと露出の多いレオタードとロングブーツだけに見えるが、実際には素肌が取れず太腿も透明な材質で包まれている。とにかく巨乳となめらかな曲線を描くウエスト、大きく張った尻、むっちりした脚線が余すところなく表れたコスチュームは、女性スパーヒーロー専門のパラッチ動画サイトの再生回数ベストテンの常連だ。一部からは教育に悪いとクレームも出ている。

どちらに聞いても、麗はスターサンダー本人はまったく気にせず、兎事な肉体を世間に見せつけていた。

静子はチキチキと白いワゴン車を脱ぐと、華やかな身体に着た黒いインナースーツ姿になる。車内の隣に置いた黒いアタッシュケースのロックを、脳から発した電波で解除した。中から多数の金属片が飛び出し、静子の身体の周囲で結合して、頭頂部からつま先まで包みこむ。

ほんの数秒で、金属片は静子を中心に収めるハイテクの装甲と化した。

アーマーを装着した静子はローズデブイスとなる。

エヌラルドクリンに輝くアーマーは、金属でありながら優美な大人のボディラインを形成した。中の人の静子よりも長身で、バストもヒップも豊かだがプロポーションを誇る金属の美女だ。正体を知るサンダークラップスのチームメイトと二部のヒーロー以外は、アーマーの外見からローズデブイスを大人の女だと信じている。

ベルは口から獣の咆哮に似た呪文をうたった。岩があるハチドリをプリントしたTシャツとデニムのショートパンツとサンダルが一瞬で消失して、全裸の肉体が別のものに変貌する。

顔はネコ科の猛獣に近くなり、短髪が伸びて長いたがみになる。頭の上から三角形の獣の耳がピンと立った。全身には獣の体毛が生えて、黄色い地に黒い斑点模様浮かぶ豹柄になる。尻の上からは黄と黒の縞模様の長いしっぽが垂れた。

シヤカを思わせる獣人の肉体化したベルは、オセロットと名乗る。

輝だけは普通に白いシャツとタンクトップのパンツを脱ぎ、自分のかたわらに置いたコスチュームを着た。ただし普通の人間をはるかに超える悪徳だ。

輝が着替えたのは、袖のない白いミニスカートのワビビース。正確には白いボディーツの襟に短いスカートがついている。高く盛り上がる胸は黄色い炎のエンブレムが描かれている。世間ではよく白いチアリーダーとも呼ばれるコスチュームだ。

チアリーダーとの違いは、背中に腰までの長さの白いマントがあり、両脇にロングブーツを隠していること。

フレアが輝のヒーローネーム。

車外に降りたフレアは、両腕でスターサンダーの身体をおぼ擁抱ごする。

「行くよ」

「OK」

フレアは抱えるスターサンダーの体置と存在しないように、背中を白いクープをひるがえして背中を飛び上がった。

ローズデブイスの背中には、オセロットがしがみつく。

「よし、ローズ、発進！」

「しっかりつかまってきたさい」

ローズデブイスのアーマーの両足の裏からジェットが噴射して、緑色に輝く金属のボディが垂直に飛翔する。オセロットはコアレスながらにしがみついている。

サンダークラップスのメンバーのうち、飛行能力を持つのはフレアとローズデブイスの二人だけ。緊急の場合は、どうしてもこういう移動になった。青空を高速で移動する四人の周囲には、ローズデブイスが形成した流線形の透明なバリアがある。おかげで直接攻撃を浴びることなく、スターサンダーとオセロットも呼吸に困らない。

サンダークラップスは事件現場へと、高速で飛んだ。

☆

空から事件現場に降り立ったサンダークラップスの四人は、そらつて目を丸くして、口をホカーンと開いて、奇怪な光景を前に構立ちになった。

駆けつける途中で音声が聞いた資料によれば、隣軍でも有数の部隊派兵力団と、関西から進出して来た武闘派兵力団が衝突して、双方が擁するオブジェクトマクガが殺し合っているというのだ。

だが目の前では、両腕がトリッキングマシンになった巨漢、背中から燃える炎の翼を広げた男がしっかりと抱き合い、互いの健腕を握え合っている。鋭い金属の爪を生やした四本腕の瘦身の男、先鋒が牙の生えた口にならした長い髪をグネグネと動かしている女が、肩を組んで爽やかな歌をデュエットしている。見るからに凶悪なミニクアント大の群れを連れだした男、見るからに凄猛なサイボーグ達の群れを率いる男が、伍ビールをぶつけて乾杯している。

オブジェクトだけでなく、超能力はないが高い悪名はある悪力団員たちも、長年の友人たちのパーティーのように、嬉気に笑い合い、下手な歌を唱し、手拍子をバックに乱舞している。そのまわりの路面には、ドスや拳銃や紅ハットが大層に打ち捨てられていた。あまりに不思議な光景に、警備たちもあつていいのかわからず、遠巻きにながめている。

「これ、なに？」

「これ、なに？」

「これ、なに？」

「嘘です」
と、ロースパイイスのエミラルドクリーンのアーマーが首をかじた。
「嘘だね」
と、オセロットが鼻をククンと動かした。妖しいオカルトな匂いはないようだ。
「これはもしかして……だとしたら、とんでもないことだわ」
スターサンダーだけは言葉をけわしく引きつらせた。

「はい、注目! このあいの暴力団抗争事件について、わたしは鈴屋から重大な見解を述べたいと思います!」
麗は金属製の指し棒を伸ばして、背後にある会議室用ホワイトボードサイズのモニターを軽く叩いた。サンダークラップス基地内の情報室に、硬い音が鳴る。
基地といっても、西武池袋線沿線に建つ大きな日本家庭院だ。売りに出ている旧家の御座敷を、麗が買い取り、スパーヒーローチームの住居兼基地として内部を改装したものだ。もちろん周囲の住民には、住んでいる四人がサンダークラップスとは知られていない。情報室と呼んでいる部屋も、かつては大勢の親戚が集まって宴会をした覺敷の広い居間に、コンピュータや様々な機器を設置した空間だ。
室内には、サンダークラップスの四人が普段着で集まっていた。
モニターの右サイドには麗が立ち、左サイドには静子が立っている。
麗は鮮やかな桜色のワンピースの部屋着。
静子は清楚な淡い水色のワンピース。
二人の前には長方形のちゃぶ台があり、両側に置いたクッションに燦とベルが座っていた。
燦は動きやすさ重視の半袖の藍色のトレーニングシャツと、白いハーフパンツ。
ベルは鮮やかな熱帯のフルーツを描いた派手なTシャツに、デニムのショートパンツ。
今日は、二天武闘派暴力団抗争途中で宴会化事案が三日後、逮捕された暴力団員たちはかつてないほど素直に麗の取り調べに応じているという。
「暴力団の喧嘩は警察の皆さんにまかせるわ。わたしは問題にしているのは、どうして今にも殺し合おうとしていた人々が、急に大の仲良しになったのかよ。わたしには思い至ったことがある。それを説明する前に、二か月のわたしたちの活動を考えよう。い。事故や火事や自然災害での救助活動の回数は変化してはいないけれど、犯罪で出動した件数は少なすぎないか?」
燦とベルが顔を合わせ、燦は首をかしげて答えた。
「そうだ、言われてみれば、このひと月の間に捕まえたのは、恐竜みたいな戦闘マシンで銀行を襲った強盗団『恐るべき黒いもも』とベルも記憶を振り返す。

「東京に進出したという噂が流れた。『大蛇結社』の構成員だけ。あときは渋谷のラブホテル街で、懐かしの『山手しゅぶり』に会うとは思わなかったよ。」
ベル以外の三人が、ラブホテル街に湧いた南アメリカの怪物の群れのグロテスクな姿を思い出して、げんざりした表情になる。南米からやってきたギャングたちはいっせいに魔術薬を飲んで、チユパカプに变身したのだ。
静子は手もモニターの数字を示して語った。
「あたしたちだけではありません。日本中のスパーヒーローが公表している犯罪者との闘いの数が激減しています。ヒーローだけでなく、警察の記録でも同様です。どう考えてもこの減少の仕方は異常です。」
麗は頭からチユパカプを振り払って、真顔な顔つきでモニターを見つめた。
「以前から感じていた犯罪の減少と三日前の暴力団パーティー事件が合わさって、わたしはある不安を抱いた。それで静ちゃんに依頼して、日本国内だけでなく世界の犯罪に関する資料を集めてもらったわ。」
「あたしたちだけでなく、リトルボルトにも手伝ってもらいました。」
「はい、これです。」

モニターの前に身長十五センチの愛らしい少女の立派な映像が現れて、ふわふわと浮かびながら、両手を広げて背後に並ぶ数字を示した。サンダークラップス基地を管理するコンピュータのアイコンは、麗の意味で人気アイドルグループのチャイナドレス風かわいいステージ衣装を着ている。
「世界各国で犯罪の発生件数が減っています。ひたたくりや引きや痴漢といった突発的なものから、プロの常習者や犯罪組織やテロリストの犯行まで、同じように減っているのです。」
コンピュータの後を指いで、静子が語る。
「減っているのは犯罪だけではなく、世界中の内戦や民族紛争が鎮静化しています。政治的な理由ではなく、兵士たちが自発的に戦闘をやめています。」
リトルボルトが両手をタンスの振り付けのようににはためかせる。モニターに写真が何枚も表示された。いずれも兵士たちが銃やロケット砲や戦車を捨てて、抱き合い、ひとつの大鍋から料理を分け合い、パーキューパーティーをしている。兵士たちの愛和で笑しげな笑顔に、四人とも見覚えがあった。ほんの三日前に見たばかりだ。
「このあいの暴力団みたいだ。」
「感動的な写真なんだけど、みんな気持ち悪いくらいにいやかな。」
「あたしにもも不自然なものを感じます。」
麗のおつろした美貌が、苦い疑問を奥で噛み砕いた顔になる。
「このデータと映像を目にして、わたしは確信したわ。恐ろしいやつらが地球に干渉しているのよ。その名は」
麗は眉根を寄せて、声を高くした。
「宇宙平和維持者『チュー』」
「え?」
「なんだって?」

聞いていた燦とベルがともに、顔全体にクエスチョンマークを色濃く浮かべる。静子だけは事前に聞かされていたが、やはりそのときにはナンミン製の脳が疑問でいっぱいになった。どれほどあれあれとどうい名前が出るかと思ったら、まるで国際的なボランティア団体みたいな名前。実際に似たような名前の団体が存在するが、静子はつい脳内のデータベースを検索したものだ。
「コスミックピースキーパーを地球人が知らないのは当然だわ。天の川銀河つまり地球がある銀河系で暗躍する狂った宇宙のカルト組織だ。」
「銀河だっって?」

「はい、注目! このあいの暴力団抗争事件について、わたしは鈴屋から重大な見解を述べたいと思います!」

麗は金属製の指し棒を伸ばして、背後にある会議室用ホワイトボードサイズのモニターを軽く叩いた。サンダークラップス基地内の情報室に、硬い音が鳴る。

「このデータと映像を目にして、わたしは確信したわ。恐ろしいやつらが地球に干渉しているのよ。その名は」

「宇宙人の侵略ってこと!!」
燦とベルは宇宙人の仕業と聞いて驚きはしたが、噂とは考えなかった。なぜなら目の前に、
麗は真撃公衆演説で語った。

「わたくしの故郷の惑星が第七次宇宙条約同盟の銀河領域では、コスミックピースキーパーは発見次第、問答無用で捕縛して、
刑務所に収監する第一級要囚対象に指定されているわ。他の多くの銀河領域でも、同様の指定を受けているのよ」
鈴宮麗は別の恒星系の惑星から地球に来た異星人。正確には異星人と地球人のハイブリッド、チームメイトに明かしていた。燦たち二人
は、麗が地球まで乗ってきた円盤型の宇宙船に搭乗して月の近くまで行っているのよ。疑ってはいない。空母が円盤は、いつかは太平洋
洋側の日本近海の水中に隠してあった。

ただ故郷の惑星と恒星の名称も、その位置も、チームメイトだけでなく地球の誰にも教えていない。故郷の法律で禁止されている
と仲間たちは言っている。
「そこまで危険視されているなんて、コスミックピースキーパーは銀河の人々にどんな願いごとをしたの? 平和を獲るといふ大義を
分て戦争を仕掛けたの?」
燦の質問に、麗は首を横に振った。

「コスミックピースキーパーはわたくしの故郷の人々にも、他の宇宙航行種族にも、なにもしていないわ。それどころか宇宙空間の事
故や惑星規模の大災害が起きたら、分け隔てなく無償で救助活動して、長い間感謝と讃歌をされていた」
「ボランティア活動の裏で、悪事をしていたんだ」
「コスミックピースキーパーは本当に善悪の団体よ。だからこそ銀河の人々は長い間、彼らがしてきたことに気づかなかった。
所属する人たちは正しいことをしていると確信して、まだ恒星間を移動するテクノロジを持っていない文明種族が住む惑星に、独自に
開発したワイルスを流行させていた。」

銀河では「隠れた平和ワイルス」と呼ばれているワイルスは、知的種族から欲望を失わせる。罹患した種族からは、最初に強い欲望
の発露である犯罪や戦争がなくなるわ」
「それはいいことじゃないかな。実際に世界中が平和になっているんだから」
「知らない間に脳改造されて与えられた平和が、正しいとは思えないわ。ロツテンピースワイルスは時間をかけて、人々から探求心や
好奇心、向上心を奪い、他者に対する愛情も失わせる。なにかを成し遂げる意思がなくなる。たいせつなものを守る気持ちも失われ
る。学問の発見も、技術の開発も、文化の発展もない。すべてが停滞して、維持すらできなくなり、やがて惑星の文明は崩壊してしま
うわ。」

コスミックピースキーパーの目的は、宇宙へ進出する可能性のある文明を破壊して、宇宙を航行する種族を増やさないこと。それが
宇宙の平和を維持するための正義だと考えているのよ」
リトルホルトが今、異力団の皆さんの身体から採取したサンプルを分析している。明日には結果が出るわ。ロツテンピースワイルス
を発見したら、わたくしの故郷に連絡して、ワイルスを運送する医療宇宙船を派遣してもらおう」
ベルが両手を叩いて、軽快なリズムを刻んだ。

「チームメイトに宇宙分けてよかった。危うく地球人が退化するところだったよ。このことはジャスティンサーカスに教えてる?」
「まだよ。結果が出るまで」
麗の言葉を、突然の甲高い悲鳴がとぎやめた。となりに立つ静子の声ではない。前に座る燦でもベルでもなかった。
リトルホルトが叫ぶ、
「ダメッー」

その言葉を残して、立体映像が消失した。モニターの映像も消えた。四人の周囲のコンピュータがいつせいに沈黙した。
基地のコンピュータに常時つながっている静子が声をあげる。
「基地の電源が落ちました! 予備電源も復旧システムも作動してない。これはハッキングではありません。システムを物理的に破壊
されています! 屋敷への侵入者の仕業です」
「まさか! 気づかずに、うちに入るなんて不可能ぢや」

サンダーワップス基地はもとも古い日本家屋で、今も外見は麗が購入する前から変わっていないが、厳重な監視装置が張りめぐ
らせてある。かつて『パラサイトクライシス』事件で、敵にテレポルトで侵入されたことはあるが、外から強引に押し入られたことは
なかった。
静子はさらに激しい言葉を吐くかのように両手を頭を押さえる。

「屋敷の外との通信ができない! 屋敷が完全に外と遮断される! あたしの脳になにを入ったのこはいっ!」
静子は幼いころに、優秀な科学者である父親の実験の事故に巻き込まれて、脳と神経系に進行性の損傷を受けた。脳と神経がしどじ
どに崩壊していく娘を守るために、父親は開発中の特殊なナノマシンを娘に注入して、神経系の機能を代替させた。静子の人格と記憶
はナノマシンが形成する機械の脳に移され、長いリハビリを経て普通の人間として生活できるようになった。
やがて静子は自分が普通ではないと気づいた。ナノマシンの脳は、人間が普通に生きていくのに必要な能力をはるかに超えるキヤバ
シティがあった。静子は膨大な情報網と常時接続して、情報を取捨選択してデータとして記憶している。普段は特に意識していな
いが、突然情報の大海から切り離されて、まるで左眼の一脚を失ったようだ。

「静子、大丈夫なの?」
「攻撃を受けてるの?」
麗と燦にたずねられて、静子は大きく深呼吸をしてから答えた。
「身体に被害はありません。ただ情報が脳に全然入って来ないと、あまりに静かひびくだけです。今、屋敷の周囲に特殊なシールドが
形成されているはずですよ。シールドを消さないかぎり、ロツテンピースワイルスの情報を外に送るのは不可能です」
「わかったわ。とにかくサンダーワップス出動よ!」
麗は指先でモニターに触れ、スターサンダーのコスチュームをまとった。
ベルが獣の咆哮をあげて、オセロットへ変装した。
燦もフレアのコスチュームに着替えた。
静子もアーマーを装着してロースパイアスになり、即座にアーマーの探査装置で索敵を開始する。
「侵入者の位置を把握しました。人数は三人。今は」
ロースパイアスの言葉に、反響する動たちの雷音が轟いた。あきらかに機械で増幅した咆哮だ。

サンダーワップスエリボーンピースキーパー
コスミックピースワイルス

「我らは『無限の観望者』だ！ サンダークラブス、出てこい！」
「俺たちはおまえらの家の中庭で待っているぞ！」
「出てきて、正々堂々と俺たちと闘え！」
三人分の声がきれいに八もつて、空気をヒリヒリと震動させるように響いた。

「我らはサンダークラブスに挑戦するぜッ！」
スターサンダーは淡い顔になる。
「この大層では、ご近所中に聞こえているわね。いよいよ引越しかしら」

オセロットのネコ科の顔は、うんざりした表情が浮かぶ。
「この家も、この町も、気に入っているの。ったく、いるんだよねえ。ヒーローに喧嘩売って、名を上げようっていう自虐的な
」

「まあ、犯罪をされて捕まるより、直接来てくれたほうがありがたいわ。わたくしたちの基地を探り当てて、セキユリティを突破で
きる能力があるのだから、油断は禁物よ。ローズ、相手はどしてている？」
三人とも中庭から動いていません。自分たちで言った通り、じっとしています。」

「アーサーの探査システムをフルに使いなから、四人は情報室を出ようとした。」
そのとき、四人の背後で盛大な破壊音が轟き、大層音が響いて震動する震動が走る。

最も速く反応したのは、通常の人間を超える反射神経を持つフレアだった。回れ右したフレアの目に映ったもの、それは、
巨大な震動のま。

天井と屋根に穴が開き、青空が覗いている。流れる白い雲がチラチラと微妙にふれて見えるのは、ローズパイイスが言った屋敷を
包むシルトのせいだろうか。

壊された天井と床の間に、震動のまが鎮座していた。
白い大きな球体の上に乗った少し小さな球体の前面に、二つの黒い円と一本の黒い横線が描かれて顔になっている。まさに標準的な
デザインの震動のまにほかならないが、サイズが異様だ。頭のてっぺんは破壊した天井の位置まで達している。

そして形を覚えたが、なめらかな表面は震動ではなく、なにか白い材質だ。
一瞬で状況を見て取ったフレアは震動を振り、砲弾のごとく巨大震動のまへ向かって飛んだ。チームで最も早く、頑強な肉体を持つ
自分が、相手の力強さを計る役目にかかわりたいと考えての行動だ。

だが、震動に出ました。
震動のまの表面から白いものが次々と剥がれて、フレアへ向かって飛んでくる。フレアの視覚は、急速で飛来するものの正体を瞬時
に見破った。
（紙？）

何十枚もの正方形の白い紙が、鳥の群れのように自分に向け押し寄せてくる。紙は、鉄骨を押し曲げられる自分の敵ではない、と判断
してしまつた。
「ただの紙じゃない！」

と、オセロットの叫びが背後から聞こえたときには遅かった。紙の表面にいくつもの文字が浮かび上がり、フレアの全身に貼りつい
てくる。両手で顔に貼つく紙をつかみ、強引に破ろうとしたがくもくもしい。顔から剥がすこともできない。
薄い紙に小さかれた口から、くくもつたため息があふれる。
「んんんっ！」

「しまった！ 魔法だ！」
フレアのように強靱な肉体と強大な腕力を頼りに活躍するスーパーヒーローにとって、魔法は最大の敵だ。今も昔も変わらない。一枚
が、表面に貼られた呪文の効果的な力をまったく受けつけない。

魔法の紙は猛烈なスピードで後から後からフレアの身体に貼りつき、たちまち全身が紙に埋もれて、紙製ミイラという状態と化し
て、地面に落下した。
同じことは機械に頼るヒーローにも言える。フレアにわずかには遅れて、ローズパイイスもアーサーの自動的な反応でふりかえつた。
しかし設備を作動させる前に、アーサーが殺到した呪文付きの紙の束に覆われ、たちまち白い塊にされて棒のように倒れた。

「おかしなやつ！」
オセロットが咆哮して、両手を前に突き出した。腕の周囲に次々に八チドリの群れが現れる。羽毛を鮮やかな金屬光沢に輝かせる小
さな鳥たちは、肉体を持つ存在ではなく、オセロットが召喚した南アメリカの精霊だ。
ベルは少女のときに、南アメリカ大陸の精霊の王女にうって特別なシヤマンとして選ばれた。世界中のどこにいても、南米の動
植物の精霊を呼び、操るのことができた。

オセロットとスターサンダーに迫る白い紙の束に、飛ぶまを呼ばれる機彩色の八チドリたちがいくつも突っこんでいく。フレア
の副腕もローズパイイスの副腕も受けつかなかった紙が、小鳥のするどい嘴で貫かれ、いともあっさりと破られる。呪文の真ん中に
穴を開けられて、魔力の源を失った紙ははらへらと塵に落ちた。

紙を破った精霊たちは、八チドリの特技であるホバリング飛行に二人の前にとまり、震動のまの表面から次々と剥がれてやつてく
る大層の紙の連撃をつづける。オセロット、スターサンダーと巨大震動のまの間は、精霊の鳥と魔法の紙が空中戦をくりひろげる戦場
と化した。その下の震動のまは、紙にパッケージされたフレアとローズパイイスが倒れたま主動かない。

スターサンダーはフレアたちを助ける機会をつかろうが、弱気な空中戦の中に入れない。
それにエグストリームストライカーズと名乗ったのは三人、震動のまの他に、あと一人がどこかにいるはずだわ。はっ！
背後に動きの気配を感じた。

「そいつ！」
振り向きざま、両手から二筋の青白い電光が獲物を追う蛇のように空中を走り、廊下に立つものを撃つた。感電死はしないが、普通
の人間ならスタンガンを出てきたように倒れて、動けなくなるはずだ。

だが廊下に立つ影は、倒れずに直立したまま。
なぜなら、人ではなく、チューリップだから。
チューリップなのに、高さは大人の男の背丈ほど、竹のように太い幹に支えられた花は、善々しいまでに真紅で、やはり大人の背ほ
どのサイズがある。

もろろろ一瞬前まで、廊下にこんな怪物じみたチューリップは生えていなかった。

「植物を操るオブジェクトがいる!」
「うわ、なんだ!」

オセロットの叫びが聞こえた。あわててまた振り返ると、オセロットの肩から上が、鮮やかな黄色いチューリップの花をすっぽりと被っていた。天井から逆さに生えた大チューリップが、樹上から獲物に降りついた大蛇のごとく、オセロットの頭を呑みこんでいる。

股っばらに落ちてくるように手足をゆらゆらと動かすオセロットの周囲から、飛びまわっているハチドリのような精霊が次々と姿を消していった。

黄色いチューリップの群がぐねぐねと響き、花弁が広がってオセロットの頭を吐き出した。

「ふあああああ……」

と、うめくオセロットのたてがみにも、三角形の獣耳も、猫っぽい顔も、茶色い花粉にまみれている。換いたコーヒードロップを浴びせられたような顔が、だらんと垂れ下り、ふらふらとした身体の動きがさらにスロウモーションになった。

股間状態のオセロットに四方八方から魔法の紙が貼りつき、大きな壺の筒のようになる。そしてフレアとローズデバイスに並んで壺に転がった。

三人に駆け寄るスターサンダーの前で、巨大雷だるまの丸い胴体部分がパツクリと縦に裂けた。広がる裂け目の中から、二人の男が出てくる。

「自分はエクストリームストライカースのひとり『花の子供』」

そう名乗った男は、若から無さげな顔を出した。うなじに黒い髪が、顔の両脇に黒い髪が、黒い口髭を生やしているために年齢がよくわからないが、まだ二十代のようだった。

そんな顔が、大きな真紅のチューリップの中にあつた。フラワーチャイルドは赤いチューリップの形の被り物を首から上は被り、中部に空いた穴から顔を出しているのだ。どう見ても、テレビで芸人がよくやっている面白芸にはほかならない。

首からは雲人風なのに、身体はグリーンと迷彩模様を描いた野戦服。足には軍用ブーツといくミラタリースタイル。スターサンダーは、男の花の被り物よりも軍服の存在に、胸の内にモヤモヤしたものを抱えています。

フラワーチャイルドは、ベトナム戦争のときに花をシンボルとした反戦運動の活動家のことなのに、どうして兵士の格好なのかし

「俺の名は『神・電』だ。顔には漆黒のアイマスクをつけている。ヨーロッパの上流階級の仮面舞臺でつけるような洒落たデザインだ。マスクをはずせば二十歳前後のイケメンだと思われ。」

スリムな身体をひっそりと密着する黒いスーツで被り、胸には刺された丸い電球の写真がプリントしてある。

「俺のウィランネームは『文・鎮』だよ。」

明るく名乗る最後の男は、声だけで推測するとまだ十代だろうか。声以外はなにともわからない。なにしろ声は紙製の巨大雷だるまから出たのだ。

三人の怪人物は声をそろえて、みっちり練習したようにきれいにハモった声をおげた。

「われら、エクストリームストライカース!」

「このっ!」

スターサンダーは両手を伸ばし、二人と雷だるまへ向かって電撃を飛ばす。はずだった。だが電撃は放たれない。

スターサンダーは体内に特別な発電器官があるわけではない。故郷の感電で、幼いころに能力が発現したときに診察を受けた医師の話では、精神力で自分の内体を中継して、どこからか電気を転送して、外に放出するのだという。両親には同様の能力はない。異星人と地球人の混血によって現れたミュータント能力だと診断された。

最初は暴走しがちな電撃を思いのままにコントロールできるよになるまでは、長い訓練を必要とした。現在では思考するだけで、自由自在に電気を操れる。

しかし今は意識を集中しても、身体から電気を出せないのだ。黒いマスクの下で、二ノマリと気取った電気が浮かんだ。

「お得意の電撃を出してくれ。出せないんだっ!」

自分の弱みを見せたくはない。スターサンダーは余裕のある表情で聞いた。だいたいいつたいなをしたのかしら!」

黒いマスクの網り笑いがさらにキチキチと輝く。

「俺のコードネームを聞いてなかったのか。『神・電』と聞いたらどう。俺は電気を消滅させられる。スターサンダーの相手をするため」

に、わざわざエクストリームストライカースのメンバーに選ばれたんだよ。まさに俺はあんなの天敵といわれた。俺がいるかぎり、スターサンダーはだの工口い好きをした女というわけだ。そうそう、ミイラにした三人は死んじやない。ただ眠っているだけだから安心しな。」

得意満面じゃべるパワーカットの前で、スターサンダーの身体が跳んだ。雷を振り、身体を回転させ、右足のブーツの甲をパワーカットの制動部に向けて叩きこむ。しかし回転軸が失敗の頭でヒットするよりも速く、ペーパーウェイトが雷だるまの表面から飛び出した紙が手足に貼りついた。

パランスを解して膝をついたスターサンダーの両手が、魔法の紙で後ろ手に固定される。両脚もひとつにまとめて紙できつく固められた。全身を紙で封じられたチームメイトと違って、スターサンダーにはそれ以上紙が貼りつくことなく、顔も胴体もさらしたままでは束されてしまふ。普段から無情な言葉をクレーンがつかくコスチュームで手足を縛られて、むろろとした二の腕や太腿に紙が喰いこんで小さな段差を作っている姿は、より恥めかしい姿を露出した。

「うううううううう。こんな姿!」

スターサンダーは二の腕を左右からパワーカットとフラワーチャイルドにつかまれて、力すくで立たされた。下心を出して豊満な胴体に身体を押しつけてくるパワーカットが、下卑た表情で寄る。

「俺たちの雇い主の希望なんてな。まあ、俺たちもこのほうが楽しいぜ」
「雇い主とは何者？」

「エクストリームストライカーズの誰かだ。さようしない。沈黙の中でスターサンダーが鋭いトナのある言葉を運んだ。

「そうそう、ごく狭い範囲で、ほんの数だけ情報を起こして、騒ぎの間に進む小悪党が、四国四県を転々としているというロウカル
「ユースの二面記事を読んだわ。それと念古屋にいきなり花を咲かせて人目を奪い、その隙に盗みをするオフビートのコソ泥がいると
いう噂を聞いたことがあるわ。二人とも逃げ足だけは早く、一度も捕まらなかったから、名前も姿も知られていないそうだけ
」」

「二ヤヤしていたパワーカーが、アイマスクの下の頬を引きよせつけてきた。

「うめせえ！俺たちはアップデイトしたんだ！もう昔とは違う！」

「今まで無口だったパワーカーも、口を開きまくって騒動させて、低い声で叫ぶ。」

「そうも、スーパーヒーローチームと懸る本物の犯罪者になった」

「左右の耳もに響く重音を、スターサンダーは平気な顔で受け流しながら、内心でうろたえた。

「やはり前はコスチュームもないB級犯罪者なのね。雇い主とやらにオフビート能力を増強されたのだわ。そこまでは雇い主は
わたくしに特別な執着があるようだけ。過去に賭けた相手から？それともわたくしのストーカー？」

「まあまあ、先鋒方、早く帰らないと大将に不手ずと悪報られちゃいますよ。あの人、悪報を言い出すと長いんだから」
パワーカーがいらついた顔を、曇るまの風い位置にある頭部へ向ける。

「ふん、デブヒーしたばかりのアマチュアは黙ってろ」

「はいはい、わかりました、先鋒方」

軽い返答の後に、曇るまの頭がスルッとずれた。丸い頭部が胴体の球面の土を移動して、黒い円で描いた眼が斜め下にいるスター
サンダーを見つめる。

「それではシャウナのお嬢様」

「それまで理的に上手に立ちどくしていたスターサンダーの表情が崩れて、目が大きく見開かれた。

「どうして、その名前を知っているの？」

「曇るまの頭がクルリと回転して、またにらんてくる。」

「聞いた？お嬢様の生まれ故郷だよ、シャウナはシャウナは、さ」

「ありえない！わたくしの出身地の情報は、地球の誰にも教えていないわ！」

「大将に質問すればいいよ。僕らはたまたまおつかいさ。ほおら、お迎えが来る」

「ペーパーエイトの巨体がふわりと曇りから浮き上がった。いつしよに紙のミイラ状態のフレア、ローズパイプ、オセロットが浮か
び、スターサンダーと女性にしがみついたパワーカーとフラワーチャイルドも無重刀になつたかのように床から離れた。

「そのままだのスーパーヒーローロートニスのエクストリームストライカーズが層根の大穴を抜けた途端、層根の上から十メートルほど
の高さの空中に、突如として巨大な円盤が出現した。

「空に浮かぶ円盤の直径は約五十メートル。スターサンダーからは底面しか見えませんが、幼いころから愛慣れた形状だ。
（シャウナの宇宙船）」

「生まれ故郷の惑星シャウナで、最も普及している宇宙船メーカー製の恒星間宇宙船だ。日本近海の海中に隠してある自分の円盤型宇宙
船型も、同じ形式のひとまわりサイズが小さいタイプ。」

「本当にシャウナの宇宙船なら、地球の探知技術から完全に隠れることも可能だわ。ローズの探査装置がごまかされたのも当然よ。き
つとわたくしたちの目に見えても、他の人の目には映っていない」

「空中で首をさじり、地上へ目を向ける。層根の前の道を歩いている近所の人々の姿が見える。会えば挨拶を交わす奥様も子供
たちも、誰ひとりとして空に注意を払う者はいない。日光をさかすかしているはずの円盤の影も、地面に落ちていなかった

「あらためて円盤に目を向けると、底面の一部分が円形に開いた。

「そしてスターサンダーの顔に、呪文が並ぶ白紙が貼りついた。

「一瞬で層根が遠くへ、」

サンダー タップス トリボーン ビースキーパー

顔から紙が剥がれると、スターサンダーはただっ広い部屋の中に入った。サッカーの公式戦ができそうな面積の床に、正座で置かれて
いる。
頭上には、宇宙空間が広がり、その半分以上を月が占めていた。スターサンダーには、天井全体がモニターになっていて、宇宙船の
外の景色を映し出す仕様がわかっていた。すでに地球をはるかに離れて、月の近くの空間にいることになる。
「これほど大規模な衛星モニターを見るのははじめて。大金持ち向けの最高級大船だわ。こんな船まで用意できるなんて、偉い主と
はどういう人物なの……」
しかし、偉い主人の姿はどこにもない。

見まわせば、ミイラにされたチームメイトはスターサンダーよりも一歩離れた位置に並んで置かれた。エクストリームストライカー
スはその後の。
ペーパーウェイトの魔法の力でミイラが直立し、頭の部分の紙が剥がれて、フレア、ロースデバイス、オセロットの首から上が現れ
る。

「なんだ!? どうなってるんだ?」

「アーマーが全然動きません!」

「クソッ! ポクの魔法を封じられてるッ!」

三人は怒罵をあげながら紙の拘束から逃れようともがくが、びくともしない。フレアの副力も、ロースデバイスの機械も、オセロッ
トの魔法も役に立たなかった。
スターサンダーが状況を教えると、二人とも愕然とする。

「う、宇宙船の中!」

「本当に月のそばにいますか!」

「こんなにジャングルから離れて、捕まを呼べるのかな?」

口々に騒ぐ声を、ホールに轟いた大音声が吹き飛ばした。

「未開人も、自分が置かれた立場を理解できた!」

頭上の宇宙空間にフワッと反響する音に、フレアたちが顔を歪めた。耳を小さくたくても、手を使えない。オセロットの三角形の
鮮耳がビクビクとわなない。

ただひとりスターサンダーだけが身がまいと、大声をほとぼらさせた。

「はつきりとわかったわ! バドリスさん!」

「俺の声を覚えていたが、レイ、地球人の血が通う汚らしい手で、兄から正当な地位も権利も奪ったことを後悔しているのだ!」

「兄!」

「どういことなんですか?」

「ボクらは誰にも食べない兄弟喧嘩に巻きこまれたの?」

ふいにサンダークラップスの目の前に青い空と海。その間を飛ぶ大型旅客飛行機が出現した。立体映像ととも、あいかわらずの聞
く者のことを考慮しない大音量でナレーションが流れた。

「今を去る二十数年前のことだ。未開人が地球と呼ぶ惑星で事件が起きた!」

飛行機のすぐ上、いきなり鋭角だらけのトゲトゲした黒い飛行物体が出現した。宇宙船の襲撃、とナレーションが語る。黒い宇
宙船艦から伸びる機械の腕で、飛行機は拿捕された。乗りこんだ乗客の死骸たちによって、敵人の女の乗客乗員だけが海賊艦へ
と拉致されていく。

襲された人々は飛行機ごと破壊されて、太平洋に沈んだ。スターサンダーが、この事件は地球ではたけ航空事故として記録されて
いるとつけくわえた。

太陽系を離れた宇宙船艦は、たまたま遭遇したある宇宙船団と交戦して逮捕された。その宇宙船団の団長が、感星シャワナの父門オ
ル家の当主トド・オル

逮捕された海賊艦にたどり着いて残っていた地球人である平凡な女子大生、雷恵美は、シャワナ星に移住した。

やがて恵美は、数年前に妻を事故でなくしていたトドと結婚して、娘を出産した。

娘の名はレイ・オル

地球では、母の姓を取って鈴屋麗と名乗った。

雷星人間の混血によって発現した能力を操るモニター能力を使い、スーパーヒーローのスターサンダーとして活躍している。

チームメイトたちもはじめて知る麗の経歴の過去が、まあまあ驚きに似てリアルなCGによって再現された。他の登場人物も、時差
もすべてCGだろっ。

レイが生まれた後も映像が続いた。

未開の野蛮人の恵美とレイの母娘が、いかにして完璧な権威威嚇を駆使して、トド・オルを説き伏せ、各門オル家を奪取し、私利
私欲を貪ったのかを描いている。

そして清麗な白髪母先バドリス・オルが、鬼畜外道な母娘から無実の罪を背せられて、正気を失った父親から勘当を言い渡され、
感星シャワナを追放される悲劇を、グッが出るほどリアルに、しかも下手くそな演出で軌跡に描写した。

制作費は山ほどかかっているが、退屈きまりまらない映画を見せて、サンダークラップスの四人は心なうんざりさせられる。笑え
る下手さでなく、痛くなる下手さだ。ヒーローたちの背後に控えているエクストリームストライカーさえ、観客辛苦に耐える隙
つきになっている。スターサンダーがほそりと吐いた。

「バドリス兄さんは昔から、才能あふれるクリエイターだと自分だけは信じていたのよ。自分がアーティストとして認められないのは、
世間の見る目がなかったら?」

見る様子の立体映像が消えると、観客全員が解放された喜びで拍手したくなった。

「未開人も、これでわかったらう。レイモ、レイの母親エミも、恐るべき深い女だ」とレイには正義の鉄槌を下されなくてはならない！」

スターサンダーの前の床が開き、歌舞役者が舞臺の下から上がり、つくるように、ひとりの男が姿を現した。本人だけあって、今まで見られていた映像のバドリス・オルと同じ顔だ。短い髪は美しい光沢のある濃い緑、瞳も緑の宝石のよう。色白の顔は人型男像のように整った造形。たしと冷徹で慈悲な性格がにじみ出て、悪役しかできないだろう。

男が「カオセンチはある。身に纏っているのは、金庫の装飾を大膽にくつめた、貴族の儀式用の重厚というファッション、装飾が施されるシャマシヤノ耳に心地よい音を奏でて、膝をついたスターサンダーの前に近づき、右足の重靴を味の大股の上に置いた。レイに正しい裁きを与えるために、俺は地球にまわ来たのだ。」

大腿の上で靴底をクリクリと動かされるが、スターサンダーは屈辱も痛みも重靴に表さず、凍りついた視線を真母兄へ向ける。「お久しぶりですわ、バドリス・兄さん。まず聞きたいのですが、地球は今、コスミックビーヌキーパーのロケットビーヌウィルスに襲われています。もしかして兄さんが？」

「その通りだ！俺は、レイとエミのせいで財産を奪われて、シャウナを追放された。俺はレイがいる地球へ行く宇宙船を手に入れるために、コスミックビーヌキーパーに加わって、やたら知らなかつた地球人の存在を教えたのだ。」

「わたくしに復讐するためだけに、地球の人々を銀河の大恩に売ったのですか！」

「やたらのかれた平和思想など、俺にはどうでもよい。コスミックビーヌキーパーに入ったのは、目的のための手段にすぎない。」

「もう目的は達しています。ウィルスを除去してください。」

「そうはいかない。任務通りにウィルスを撤かないと、コスミックビーヌキーパーに船を取り上げられてしまつたらな。」

「バドリス兄さんはいつもうです！自分の身勝手な欲望と目的のために、オル家の名前を利用して人々を騙し、何人も女性を犠牲にした。バドリス兄さんが父様に追放されたというも嘘です！父様がバドリス兄さんを裁判にかけようとして、勝手にシャウナの外へ逃したのです！すべてを自分に都合のいいように歪曲して！」

「黙れっ！」

「あぐっ！」

スターサンダーの腹が強く蹴りつけられた。豊満な身体が人形のように背後へ飛ばされ、床に転がされる。フレアたちが怒りの声をあげるが、バドリスは妹に視線を戻したままで、悶々なさそうに右手を振った。

「約束通り、サンダークラブの旗はおまえたに決まってる。好きにして。」

歓声をあげるエクストリームストライカーズと怒るフレア、ロケットバイク、オセロットを乗せた床の一部が、エレベーターのように階下へ降りていく。

スターサンダーの縛られた身体が横たわった部分だけがきれいに残され、新たに現れた床が穴を元通りにふさいだ。同時に手足を繋ぎ続けた紐が力を失い、ハラハラと身体から剥がれた。

「バワーカットがなくなつたわ！今なら電撃を使える。」

素早く立ち上がり、真母兄と向かい合ふと、首段はほとんど呼吸をするように発動させられる電気の召喚に、全身至堂をこめた。ホールを焼きつくす勢いで、全身から強烈に放電するつもりだ。

「ええっ!?」

また不発。身体からあふれるはずの電撃はすべて消え失せた。目の前でバドリスがせせら笑っている。

「どうして!?」

「俺がつうっかりして、バワーカットを下がらせたと思つたか。バワーカットの電気を消す能力を、コスミックビーヌキーパーの科学技術で増強させたとき、俺の身体にもコピーしたのだ。未開人との混血で生まれたレイの思まわしい能力も、俺には効かなくて、俺が地球に下りて、直接レイを捕まえてもかつたが、あらゆる機械が汚染物質を撤去する未開惑星に行くんだ。」

兄が言葉を終える前に、スターサンダーは素早く問合いを話めて、左足の蹴りを放った。確実に相手の頭にヒットすると見えた筈が、バドリスの右手であつたりとつかまれる。

「なっ!?」

サンダークラブス！リボーン ビースキーパー

バドリスの右手の一振り、スターサンダーの身体が床を離れた。片手だけで高く放り上げられ、落下してくることに、バドリスの重靴の金属プレートで捕獲したつま先が逃が、スターサンダーは回避を取れずに、腹に蹴りが容赦なくめりこんだ。

「がふっ！」

激痛が胴体を貫き、身体が風に巻きあげられた木の葉のように空中でクルクルと回転して、背中から床に叩きつけられた。金門オル家の教育の一環として子供のころから本格的な武術を習得してはいるが、身体能力はあくまで常人だ。電気を封じられれば、ただの女にすぎない。

それでも、バドリス兄さんの力はおかしいわ。」

同じ指導者から武術を習ったバドリスとは、何層も相手をした。今の兄はかつてより、スピードもパワーも段違った。

「兄の強さを思い知つたか！」

軟着があふれる地味を放って、バドリスの右足が床に倒れた妹の顔をかすめて踏み下ろされた。ピキッと音をたてて、重靴の周囲の硬い床に細かいひびが広がる。

「普通のシャウナ人の刀じゃないわ、間違いないわ。バドリス兄さんは肉体の強化術を受けている。」

「未開人と混血のレイが、正統なオル家の後継者。真正のシャウナ人である兄に勝てるはずがない。すべてにおいて俺はレイに優っているのだ！」

スターサンダーはよろけながら立ち上がり、憤怒のこもった瞳で、熱弁をふるこの顔をにらみつけた。

「妹に勝ち誇るために、自らの肉体を改造して、銀河系全体の敵の手下になり、地球人を誘はそうとする。バドリス兄さんは底なしに強弱しました！父様が知れば、どれほど嘆かれることが、想像もできません！」

「底の見えない強弱をするのはレイのほうだ。レイが立ち回る手本を見せてやる。」

またスターサンダーの前の床に穴が開き、三つの人影がせり上がってくる。

正面に現れたのは、上品なタークフルのスイートと膝下まであるスカートを着た若い美女。首にはライトルと赤のスカートを巻き、靴は黒いパンプス。

短い髪に縛られた顔はハッとするとするほどの美女だが、瞳に力がなく、茫洋としている。開いた口から出る声は滑舌が良く、八千八千と聞かせる。心ここにあらずと聞かされた。

「わたしは日本スカイエース航空成田線ロサンゼルス行き187便のキャビンアテンダントの椎名美里です」
その便名！ 母様が手荷物に拉致されたときに乗っていた飛行機！ その名前も母様から聞かされたわ。母様ごいっしょに手荷物に連れられたキャビンアテンダントの名前よ！
キャビンアテンダントは答えず、口を開き、

「わたしはロサンゼルス行き187便の乗客、癌口総合病院のナースの西村実奈です」
左隣の二人目は、白いブラウスに、モスグリーン^{モスグリーン}の膝下までのスカート。

「ロサンゼルス行き187便の乗客、高橋梨花^{たかねりか}、清見大学教育学部の教育実習生です」
ゆるやかに波打つ髪は背の中ほどまであり、女教師らしい服装に比べて、麗麗でまだ高校生ほどに見える。

地球人美女の背後に立つバドリスが、ナースと女子大生の顔をつかみ、得意満面に笑って、黒髪をクシャクシャと乱した。ナースのきちんとまとめた髪型が崩される。

二人の名前も、母親から聞いているだろう。三人ともエミというしよに宇宙海賊に拉致された地球人の女だ。地球の女たちは、エミ以外は奴隷商人に売られた。あちこち探したが、見つかったのはこの三人だけだった。

スターサウンダーは地球に来てすぐに、母親が乗っていた飛行機のことを調べた。地球では、原因不明の空中爆発で全員が太平洋に沈んだ事故とされているが、犠牲になつた乗員乗客のニュース映像や写真も見た。目の前にいる三人の顔も、資料で見た記憶があった。

「嘘だわ。海賊にさらわれた女性はずべて母様と同年代よ。三人とも若すぎる。着ている服もエグスティブストライカーズに用意させたのね」
「若い理由がわからないわ。やれ」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

「バドリス御主人様のお聲のままに」
「お仕えいたします」

と、スターサンダーはうめいた。触手としか表現のしようがない「ワ」のものが、自分の裸の胸の上を這いまわっている。ようやく理解した。「うして美里が年齢を重ねていないのか、かつてとは違う母乳になっているのか。」

「美里さんは『麗麗な器』の犠牲になったのね！」

美里はさらに触手を押し出すように、両手の指を差からい乳肉に食い入らせて、快感に身悶えた。「はい、さようです。はああ、わたしはワーストワームに寄生していただいて、この無敵な乳奴隷の肉体になることができまして、うっんん、とっても感謝しています！」

美里の表情と言葉に、スターサンダーは名状し難い嫌味を覚える。ワーストワームの名はシャウナで検索した宇宙探査の資料で知った。もとは銀河の辺境の惑星で発見された寄生生物という。その特殊な生態を利用するために様々な研究をされたが、結局人体への危険が著しいので銀河規模で利用が禁止された。

しかし異社会では研究が進み、ついに寄生した女を理想的なセックス奴隷にする道具、裏の商品名『ワーストワーム』になった。見たのは一般に配布される公的な資料だったので、文字と音声の解読だけで、犠牲者の映像は添付されてなかった。

はじめて美里に直面した犠牲者のあまりにも凄惨な姿に、愕然とするしかない。

ワーストワーム自体には知性がない。ただ寄生した女の肉体を作り替える。性感が高まり、淫乱な肉体になる。他人の命令に従順に従い、どんな酷いことでも喜んで実行して、それを大きな快楽とするようになる。不老不死ではないが、外見の年齢を変わらなくするという。

美里の肉体の容姿と精神の姿容そのものよりも、それを望んだ者たちの邪悪な欲望に背筋が凍る思いがある。

「はああ、んっ、くっんん、レイ様わたしと同じ至福の境地をたっぴりと味わってください！」

搾乳オナニーに耽溺するキャピリアマントの乳首から伸びた一本の触手が、スーパーヒーローの左右の乳房に千手千足を巻きつき、まるで紐で縛られたハムのようなありさまにされた。触手のうねる白い先端が、乳首に強く押し込まれる。

「ひっっ！」

敏感な乳首に、指先を針でつつかれたようなわずかな痛みがチクッチクッと閃く。そして異様な感覚が胸の中に生まれた。



「は、入ってくる！ なにかが、胸の中に入ってきているわ！」

細い紐のようなものが、うねうねと爬行しながら、乳首から重量感たっぷりの乳肉の中へ這ってくる感覚が、鮮明に感じられる。理性では、異常で不安味に思えて仕方ない。しかし胸からは別のものが湧き上がってきている。胸全体が熱く湧けるような快感だ。

性の経験が豊富なスターサンダーにして、言葉で表現できない未知の愉悅が、紐の粗のうねりと進行にしたがって大きくなってくる。

「あっ、あああ……！ これは、はうっ、ワーストワームがわたくしの中に入ってきているの、あっあああっ！」

「さようです、レイ様の胸の中に、わたしのワーストワームが子供を挿入つけたのです。これでレイ様も、わたしと同じ無敵な肉体になれます。さやバドリヌ御主人様も喜びのことでしょう！」

美里の胸がめくれ上がり、白い歯の列を見せつけて笑った。

「これからわたしが体験したものを、乳奴隷の稚女美里が味わったことを、レイ様にも体験していただきませう！」

周囲が変貌した。宇宙船の広い展望室も、天上の宇宙空間もなくなる。かわりにまったく別の光景が広がっている。

「ワ、ワーストワーム！」

そこは、あからさまにいかげしい場所に見える。各門オム家のお嬢様ならば、けっして足を踏み入れない場所。地球でスーパーヒーローをはじめてからは、何度か潜入したり、強引に通行された場所と同じ空だ。

スターサンダーと美里がいるのは、恐ろしい空間。お世辞にも清潔さや美しい聲や天井の室内に、大勢の男たちがたむろしている。全員が地球人やシャウナ人の間に入って多少の違和感があるだけの、いわゆるヒューマンイド種族たち。銀河系の多数の惑星でそっくりなヒューマンイドが進化して、異種種族間で子孫を作ることが可能なのは、銀河系最大の種のひとつとされている。男たちはひとり残らず繁殖で凶暴な気配を放散している。正義感や倫理観の欠陥が如実に露にしている。ここは凶暴な欲望を隠す必要のない場所だ。手に着の草や肉の塊を持ち、下卑た言い合いをして、馬鹿笑いをする男たちが円陣を作っている。

円陣の中心がぼつかりと空いていて、そこにスターサンダーと二人の牝奴隷は立たされた。周囲の光線が変わって、自分と美里の姿も、巨乳と母乳をさらけ出して向かい合う体勢も変わっていない。なににより乳首と乳首をつなぎ、双方に異形の快感を与える巨乳手がそのままだ。すぐにスターサンダーは理解した。娯楽用の立体映像だ。シャウナ人にとってはあたりまえの技術。映像に合わせて男たちの野卑な声も聞こえるだけでなく、部屋にこびりついた臭いまでも感じられるのは、音質が散布されているから。

見渡せば男たちの中に、バドリスも床に座ってました顔をしている。立体映像の群衆相手に、自分だけは周囲の上品な轟とは違うという態度だ。美里が微笑み、周囲の男たちへ髪をたぶぶりに両手を振りながら答えた。

「この映像はアズロ・バロロの闘争を再現したものです。わたしはかつて、この闘争で見物にされてきました。宇宙海賊から奴隷製造組織に売り飛ばされ、ワーストワームを植えつけられてから、二十年以上の間にわたしが体験した様々なことのひとつです。」

美里の背後の床が開き、床下へとつく階段を黒い影が上ってくるのが覗けた。地鳴りのような唸り声と、濃密な動物の体臭が立ち昇ってくる。

「グキムルルルルル……ルルルル」

「ああ、おいでになられたわ！」

背後から聞こえる獣の唸りに、美里の不安した美脚がさらに春色を濃くした。母乳を持ち上げて埋めるように自然と力が入り、乳首から伸びる二本の乳手がフルフルと振動する。乳首の根元から快感のミルクがたらたらと流れ落ちた。

乳首の振動が揺られたスターサンダーの胸に伝わり、乳首から挿入された指がたたく。巨乳の内側から快感を振り出される。

「あーん、あああ！」

スターサンダーは身悶えながら、美里の扇越しに床下より又も覗いた姿を目にした。やっぱり獣だ。立体映像のクワウラの中に気取った声も流れた。

「巨獣ご存じ、当クワラのスーパースター！ 最高の男闘！ グルングワラの音場だあ！」

観客たちの大歓声を浴びたグルングワラとは、スターサンダーが見たことのない大きな獣。前かがみになった身体は、三メートル以上はある。頭はマンデルにさらに凶悪なデフォルメしたよう。身体はトクマ「リウ」の中間に見える。全身が影のように黒い剛毛に覆われて、触れればチクタクと濡れた。尻からは毛のないトクマ「リウ」の尻が長く伸び、階段に引きまわっている。

剥き出した鋭い牙も、盛り上がる筋肉も、見るからに過剰に毛むくむくした獣だが、最大の問題はグルングワラだけは立体映像ではなく、実物だ。バドリスが低いおもちゃを自慢する子供のようにしゃべる。

「そいつはわざわざアズロ・バロロのいかげしい店から買った。もともと俺達のジャングルに棲息する獣だぞうだが、ヒューマンイドの女知事のように改良して調教した畜産家畜だぞ。けっとうな健将だぞうが、コシミックビーストスーパーがくれた活動量に比べればはした獣だ！」

スターサンダーの目には、グルングワラも採れぬ欲望の犠牲者として映らなかつた。

美里は首をよじり、ノスタルジー混じりの熱い視線を、グルングワラの股間に集中していた。視線の先には、密生する黒い獣毛の中から、一本の赤黒い肉の巨根が力強くそそびえ動いている。

「どうだ、美里。ひまじぶりにグルングワラに会えたいだろう。アズロ・バロロにいたるには、毎日その獣の相手をしていただからな！」

「あああ、感謝いたします、バドリス御主人様。あまりに懐かしくて、おっはいははしたなく疼きます！」

「あひひひ！」

またらカッが揺れ動き、スターサンダーを悦楽に引きずり込む。

「あああ、偉大なジャングルの獣の王者様。わたしに委任させてください！」

美里が身体を引くと、乳首がスターサンダーの胸から離れ、スリと乳首の内側にもどいた。

しかしスターサンダーの乳首に入ったものもはず、胸の中に残ったまま。両腕をつかまれたままもがいて叫ぶ。

「あああ、待って！ わたしの胸の内側に、くっ、なにかが残っているわ！」

「先ほどお教えした通り、わたしのワーストワームの子供を、レイ様のおっはいにのみそつけてあります！」

美里の顔に涙れみはない。あるのは新たな仲間を歓迎する悦びだけだ。

「すぐにレイ様の中でワーストワームが成長して、密生されて、バドリス御主人様の牝奴隷にさせていただきます！」

「そんな！」

愕然とするスターサンダーを無視して、美里はグルングワラの前に立ち、いそいそと両手で社の肉棒を握った。キャピテンテックの細い指が比べれば、ほぼ垂直にそそり立つ巨獣の肉棒はあまりに大きい。太さも長さも子供の腕の肘の肘から先ほどちもある。先陣の肉棒も握り拳のように「コンコン」と膨れあがった。全体が黒く赤黒い色で、黒黒い血脈がからみついてた黒のまぶたがまぶたがうらやうらやうらと揺れている。美里がうらやうしく鼻を近づけた。

「チノッチュッ、ンチュ、クチュウ……」

ことさらに大きな舌の舌色を奏でて、顔の角度を変えて亀頭のおちこち口つけの術を施らす。
星の猛獣のマンタビに似た顔が左右に揺れ、顔の先にある鼻の穴を広げ、器をまくり上げて牙の列を露出した。
「キョルルル」

今までとは違う舌色の噴き音が、牙の奥からあふれ出る。新たな舌を聞き、表情を見るだけで、グルンガラヤラが動物としてはかなり高い知性がある。とスターサンダーには感じられた。
人間の女性性欲を感じて、素直に喜びを味わえるほどに、知性を歪めて底上げされているのだから、星さんのほうも、あんなに一生懸命になっている……

星里は熱意をこめて、獣の亀頭にキスをうつけている。肉軀を握る両手も十に動いて、さらにひねりを加えて愛撫した。
「次は、舐めさせていただきます。はああ、わたしの舌を味わってください」

星里の口が開き、舌が外へ伸びた。唾液に濡れたマンタビの肉が、まるで水晶体を磨きあげるように、亀頭の表面をていねいに這いまわ。

「ヒチャ、ヘチュ……ルロワ、レル……クチュル」

スターサンダーはついさき自分の口の中を蹂躪した舌を直接確認して、獣の肉凶器を舐めまわす動きに驚嘆させられた。
「良いわ！ 動きもすてきで器用で、地球人とは思えない。あれもワーストフォームの肉改造のせいなの？」

「あつー」

両腕をつかんでいた襟袷と梨花に背中を押されて、スターサンダーは前に進まされた。頭上から黒い毛がびっしりと生えた大きな左胸が落ちてきて、六本の太い指でむんずと頭をつかまれる。頭のまわりで触れる指の力を感じて、グルンガラヤラが巧みに握力をコントロールしているとわかった。その気になれば生卵のように頭を握りつぶして、脳を床にがまけられるだろう。

頭をつかまれ、グイッと猛獣の股間に引き寄せられる。星里がフェラチオをうつけながら、スターサンダーのための場所を空ける。

スターサンダーの眼前に、亀頭が来る。赤黒い表面を熱心に舐めまわす舌の動きを見せつけられ、悦びに堪く星里の裏と隣近に直面させられた。アツプで尻をつけれを、非人間の特大ペニスを圧倒的な迫力で、フェラチオ素直に溺れる星里の顔の深らさに驚愕が滲える。視覚だけでなく、星里の舌が埋らずにフェラチオという濡れた舌色が鼓膜を叩く、巨根が放つ猛々しい獣の性根によって、鼻孔を満たされ、肺の細胞のひとつひとつを染め上げられた。

「はうっー」

胸がカッと熱くなった。乳房から乳肉の奥まで貫くワーストフォームが、鼻れながら急成長をしているように感じる。

「あつ、ああ、はおお……」

二つの胸の中で寄生生物がうねくうねるたびに、乳房と乳房がヒリヒリと濡れて、熱い疼きのバルスが縦横無尽に走りまわる。

星里が舌を亀頭の上でたうたせながら、器用に言葉を発した。
「レイ様もグルンガラヤラ様の野生の勃動めたくまじく感銘を受けて、胸がスキスキしてしまっ。もう舐めたくてたまらなくなつたでせう」

亀頭にスターサンダーのためのスペースを空けるために、星里の舌先が反対側へ移動した。
「そんなことはないわ」

否定した途端に、頭をつかむ腕が動き、顔を亀頭に押しつけられた。
「熱いっー」

と、叫んでしまっ。鼻先と鼻にまじく密着する唾液まみれの亀頭は、本当に体温が高いのか、ワーストフォームのせいで生み出された至適なのか、判然としない。

グルンガラヤラの胸体が高貴的な柔軟さで前に湾曲して、スターサンダーの視界に大きな球が下りてくる。マンタビの顔が黒緑なニヤニヤとした表情のしやがない微笑を作り、股間のスターサンダーをにらみつけた。

「キュルルルル、ムコルル！」

指先が頭皮をなぞるコロコロという音に、異母兄弟の響々とした音が轟然と。

「レイもおとなしくグルンガラヤラの言いつことを聞いたほうが良い。聞き分けのない化け種は手足を引当てるように訓教してあげたら、でもおかしさ。貴重な化け種を殺さないように右調教してあげ」

パドリスの言葉には、あまりに異母だからこそ真実味があつた。
「昔よりもおとなしくなつてはいるパドリスさんなら、平気でやちやちや……舐めるしかないわ」

舌を出して、亀頭に触れた。

「うあああああつー」

瞬間に、強烈な味覚が舌の表面を焼き、矢のまじりに口から顔へと突き刺さつた。

スターサンダーは地球に来る前に何人もの男のモノにフェラチオをした経験がある。シャウナ人としては普通のことだ、すべて巨口に同意しての行爲だ。そして地球でスーパーヒーローをほめてからは、犯罪者に口での素直を強制されたこともあつた。

どららの経験ともまったく違う。まるで亀頭に刺さるかと思つたほど、強烈な辛辣な刺激だ。反射的に舌を引っこめて、顔を離そうとしたが、グルンガラヤラの腕力が許さない。

「キムグルルルル、グアユロロロッ」

真倒の唸りを受けて、キムに強く顔を亀頭に押しつけられた。素顔が上下に動き、スターサンダーは顔全体で亀頭と肉軀を何度もすりさらされる。摩擦で顔の皮膚が破れ、目や鼻や舌がズレ取りられる恐怖に駆られて、たまらず叫んでしまつた。

「あくっ、やめてーんんんっ、紙め…… ああ、ちやんと紙めわー」

人間の顔面をどうやって判断しているのか、疑似マンタビに顔に挿入した満足が浮かび、巨根の動きが止まる。

スターサンダーはまたおとす舌を出して、再動たしと思えない亀頭に這わせた。

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

「あつ、あつ、あつ……」

最初の衝撃は少し薄れたが、今にも嘔吐しそうなる苦しい味だ。実際に胃がグルグルと暴鳴をあげて凍結している。

「ああ、グルングヤラ様のたくましい生殖器を調教いたします」
 両手を下へ伸ばし、自分の唾液と獣の精液にまみれた亀頭をつかみ、女性器の位置へ移動させる。
 「さあ、どうぞ、美里のいやらしいおまのこを、存分に味わってください」
 グルングヤラの右手が無操作に下ろされ、美里の中心に亀頭がスグリッと首を立てて突き刺さった。遠慮も容赦なく巨大肉棒が女性器を限界以上押し広げ、キャビンアテンダントの体内に埋まってしまう。喉と同じように、腹の表面が内側から押し出されて、大きく盛り上がるのが見えた。ひときわ突出した亀頭部分は、すぐにスグリツの中に移動した。
 地球人の女の肉體で、地球人のペニスをはるかに超える巨大な凶器を受け入れられるのも、ワーストチームに寄生されているからだろう。とはいえ獣棒の本質は受け入れられても、長さですべて呑みこむのは無理だった。広げられた膣の中に入ったのは全長の三分の一にすぎない。

三メートルの巨額の腰からそそり立つ長大なペニスに突き刺さった女性器は、面影が床についていなかった。胴体をつかむ巨腕と柱状器を支えられて、宙に浮かぶ両脚が指を反らして、ピクピクと踊っている。
 「あひいっ！ 気持ちいいひいっ！」

美里の顔が左右に振りたられ、髪が大きく広がった。目から唾液の湧きあがって、水滴となって飛び散る。鼻の口のまわりの獣の性汗も、グルングヤラの身体にもどって、黒い剛毛に白い斑痕をつけた。スターサンダーにも降りかかってくる。
 「イッチャッ！ 美里は入れられただけでイッチャいますっ！！」

全身の淫靡な響きで通る「ッ」の導乳が、またミルクが噴出した。左右の勃起乳首から「エルル！ エルルルルル！」と濃厚な白い体液が飛び散るたびに、美里は絶頂の歓声を叫ぶ。
 「イクッ！ おっはい汁出てイッチャッ！ おっはいとおまのこ両方イクッふうふうのウッッッ！！」
 エクスタシーの高熱をはらんだ瞳がスターサンダーを見つめた。
 「はおうううう、次はレイ様の番です。あああふうう、イクッ！ レイ様もグルングヤラ様に犯されてイク幸せを味わってください」

グルングヤラの太い肉棒の根元の体毛がざわめき、美里に挿入している肉棒の横の位置から、スターサンダーから見て右側にもうひとつの亀頭が顔を出し、ぐんぐんと成長して新たな女性器が直立した。長大な獣ペニスが二本、左右に並ぶ。
 地球にもペニスが二本ある動物はいるし、広大な宇宙では珍しくないことは、スターサンダーも知っている。
 「しかし今は脅威を感じない。」

レイ様のほうは副性器なので、はうううううん、わたしに入れていた方がいいものより細くて、おああ、申し訳ありません」
 美里の言葉通り、二本目は長さこそ同じだが、太さは地球人の最大レベルにギリギリ収まっているサイズだった。しかし安心なさできなかった。
 「フェラチオをして、精液を浴びせられただけで、胸のワーストチームが凄まじく成長したわ、アレに費かれ、体内に射撃されたら、想像するのも恐ろしい……」

グルングヤラの左手がスターサンダーの頭から胴体へ移動して、美里と同じように持ち上げられる。
 「あああ、離してっ！」
 手足を激しくはたつかせ、連続して亀撃を発しようとして不発に終わる。それでも必死に撃れつつけるスターサンダーの下半身は、美里の手が伸びてきた。
 「はああ、レイ様、じつとじていてください」

美里が本好きの肉の凶器に費かれた獣の表情のまま、乳首から二筋の母乳をたらだたら滴らせながら、ポケットから出したナイフを器用に動かす。鈍い刃先をスターサンダーのコスチュームの下腹部から股間をくぐって、尿の谷間を穿たせた。
 ヒーローコスチュームの下半身部分が縦に裂けて、恥丘と肛門が露出する。コスチュームの前面は胸と股間が切られて、かろうじてへその位置だけが残っている淫靡な状態にされた。
 「ああ、レイ様の深らなこぶすが、とても美しいです」

美里とグルングヤラの視線を受ける恥丘は、精液を浴びて絶頂したために、縦の亀裂がすでにゆるんで、隙間から透明な液体が溢れていた。
 「キョルルルルル！」

獣の獣の咆哮が放たれ、すぐさま両腕がスターサンダーを、美里の右腕にそひえる亀頭目掛けて振り下ろした。
 ギチャッ！ と自分の肉の裂かれる音が、スターサンダーの体内に鳴り響いた。濡れた膣内を、赤熱した鉄杭が一瞬で駆け登り、肉の三分の一が侵入する。内側から強烈に押し広げられて、女性器が甲高い悲鳴をあげた。
 身体は悲鳴をあげても、声帯は声を出せなかった。衝撃で喉がつまり、呼吸もできず、大きく開いた口の中で舌が「リ」ラハ「ヒ」ヒと生えた黒い剛毛が剥き出しの胸に当たり、チクチクした痛みがいくつも走る。

スターサンダーの面部も床に届かず、美里の面部と「ヒ」ヒとゆるゆると頻りに揺られた。
 「け、限界……動かれたら、爆力突き破られる……あ……」
 胴体から腕が離され、自身の体重に押されて身体が沈む。亀頭が内臓を貫通する恐怖に襲われ、かすれた悲鳴が飛ぶ。
 「ひいっ！」

自分の身体を支える唯一の手がかりになるものに、がむしゃらしがみついた。それは目の前にあるグルングヤラの胴体。びつりと生えた黒い剛毛が剥き出しの胸に当たり、チクチクした痛みがいくつも走る。

三十分あまりも胸の中を異常な乳液が吹きすさび、スターサンダーは白い精液だまりの中であつちまわつた。

「ワーストワームの狂奴が追まるところに、グルングヤラに犯された疲労が養分が消費されて、体力が回復した。この活力も寄生生物もたらした効果かと思つて、立ち上がる気が起こらず、床に横たわつたままだ。」

「レイ様、次は牝奴隷環奈で遊ぶのです。」

いきなり横柄にナースの西洋環奈の白衣を穿入つてきて、右手でスターサンダーの左手をつかみ、強引に引っぱり上げて立たされた。

「レイ様には、環奈の長い牝奴隷生活のなかで、最も愉快な遊戯をしてもらいます。」

外見は十代半ばの環奈は、美脚の年齢にかかわらずスレフアンナーらしいキレキレなら重みのある口調で告げる。提案ではなく命令という調子だ。羞恥の媚びる口調とは対照的な発声を聞いていると、同じ牝奴隷とは思えない。

「環奈さんワーストワームに。」

「もちろんです。環奈も喜ばせています。」

壁々と応じるナースの態度に、スターサンダーは困惑させられる。

「では、環奈が感重マママで参加した人間レースで楽しみましょう。」

環奈のかたわらの床が開き、奇妙なものがせり上がってきた。形は手袋とハイヒールだが、銀色に輝く金属でできている。環奈はナース用の白い靴を脱ぎ、銀のハイヒールを履き、銀の手袋をはめた。そして身体を前に倒して、膝を床につき、銀の両手を床に置いた。

おそくはワープラの乳房が重力に引かれて、股の白布をつばせせ。

四つん這いになつた環奈が、スターサンダーを見上げる。

「レイ様、わたしの背中はまだがるのです。」

「ええっ。」

「まだがらない！」

「でも、そんなことは……わたしの身体は汚れているし、コスチュームの股間がぬれたままだ。」

「ピシッという打撃音が響いた。音源に顔を向けると、バドリスがいつの間にか乗馬用の鞭を手にして、にやつきながら床を叩いている。

「レイがまたがらないと、環奈が罰を受けることになるぞ。この鞭で尻を叩きの刑だ。」

「わかつたわ。」

鞭を決して、右腿を上げて白衣の背中にまたがり、取まりのいいウエスト部分に股間を乗せた。裂けたコスチュームから剥き出しになつてゐる恥丘が環奈の背中に押しつけられて、自身の愛液と鞭の精液が混ざつたものが白衣に染みこみ、色を変えた。

「ああ、恥ずかしい……」

知らない人が見れば、スターサンダーがナースを馬にして處めている状況だが、スターサンダー本人は悠々盛々羞恥心に苛まれてゐる。女を馬にして、自分の恥ずかしいもので汚れた下半身を乗せるなど、恥辱をさらしているだけだ。

「それでは、ハミを環奈の口にはめるのです。」

ナースがポケットから出したものを、スターサンダーの手に押つけた。ハミとは、乗馬のときに馬の口に挿えさせる馬具だ。ハミの両端に手綱をつけて、騎手が馬を操る。

「挿されたものは馬用の金属製のハミと異なり、細くて柔らかいハ材製の馬具の両端にリングがあり、手綱が結んである。」

「人間にハミをつけるなんて、そんな馬あつかいはできないわ！」

「環奈は馬です。馬にはハミが必要です。」

前を向いたまま冷静な言葉を吐く環奈の姿が、スターサンダーを驚愕させた。またピシッという鞭を打つ音が聞こえてくる。しかもたなく両手を環奈の顔の前でまわして、ハミの棒を唇に当てた。口が開き、ハミを強く噛みしめる。本物の馬は前歯と臼歯の間に歯がない部分があるので、ハミを咬んでも歯に当たらないが、人間だと噛みしめざるをえない。

「これいいの？」

「はいです。」

サンダー・クワップス・シリボーン・ビースキープ

ハミを噛んでいるのに、声もモゴモゴしないで鮮明に聞こえた。ハミそのものに音声を補正する機能がついているのかもしれない。

「マママの奴隷遊園地名物の人間レース、グートンします。」

ナースが四肢にはめた銀の手袋とハイヒールが変形した。手袋と足首の先を包みこみ、細長い棒状に変形して、白衣の身体を高く持ち上げる。環奈は身体を床に対して水平にして、手足を下へ向けた姿勢で、四本の棒の上端に集つてゐる状態になつた。スターサンダーも観た地球の有名な舞踏劇で、大きな四足動物を演じる俳優のようだ。

環奈の背中にまたがるスターサンダーは、サラレッドの背中に乗るよりもさらに高くなつた。当然、両足は床につき、思わず口のハミから伸びる手綱を握りしめた。

「あの、わたしの体臭がすべて環奈さんにかかっているわ。大丈夫なのかしら？」

「改造牝奴隷なので問題ないです。奴隷遊園地ではもっと重い騎手を何人も乗せて出走しました。でもレイ様を安定させるために、もうひとつ縄を用意します。」

スターサンダーの背後から、ズルズルという音が聞こえた。かりかえると、白衣のスカートが尻の合間よりも上にたくし上がり、立派な豊胸が全開に露出している。

尻からは、本来は地球人の肉體には存在しないものが伸びてゐた。

環ならしげが生えている位置から、一本の白い触手がうねうねしている。羞恥の乳房の中から現れて、スターサンダーの乳房の奥に挿入した触手と同じ。

「この触手が、ワーストワームに寄生された印なのです。」

「挿入します。」

環奈の前の口から医療用指が出て、後ろの触手が背中に乗るスターサンダーの剥き出しの尻の合間を滑りこんでくる。



二人分の寄生生物に侵された女性には、官能の誇りをとめる術は存在しなかった。たやすく限界を超えてしまふ。
「イクッ！」

スターサンダーは両手の掌をきつく握り締めて、絶頂の叫びをあげる。

「イチッちゃー！ お尻がイクッうううッッッ！」

白い膣手を駆えている尻の穴から、いきなり透明な液体が噴出した。膣手に伝わった肛門の縁が、盛大に噴き出る体液に振動させられて、連続しておなるをきくような音が激しく鳴り響く。

「プリュー！ ハリュュー！ ハビィッ！ ビッピリリリリリリリッ！」

「なに!? お尻から、なにかが出てるっ!!」

もちろん、自分の肉体がこんな異様なエクスタシーの反応をするのははじめてだ。そもそも意識の中にこれほどの量の体液を分泌する器官が存在しない。これもワーストフォームによる寄生改造のせいだ。

「ああっ、出るっ!! お尻から何が出るのが気持ちいいのッ！ ひあああ、気持ちいいイィイッ、もっとお尻がイクッうううッッッ!!」

まるで男の射精のように、あるいは羞恥が母乳の肉離れから射乳するように、肛門から未知の体液が噴き上がるたびに、背筋が濡れるような快感が走った。そして快感が走れば、また新たな尻の射出がくりかえされる。尻絶頂と尻噴水のループができあがり、走る環奈の上から尻液と悪液が後へ流れていく。

「ハリリ！ プリッシュウウ！ ドビルルルッ！ ビシヤアア！」

止むことなく鳴りつづける尻の噴射音を聞かされて、スターサンダーはついふりかえった。自分の肛門から流出する液体が、後続の女馬と女騎手たちにビシヤビシヤとふりかかるのが見える。立体映像が即座に反応して、女たちの姿がびしょ濡れに変化していく。濡れた女騎手たちが、まさに美脚を演がせ、あられもなく見せつける巨乳を大きく弾ませて、イクッ！ イッちゃー！ イキます！ と口々に叫んだ。

自分が排泄した体液を浴びる女たちを目にして、立体映像だとわかっていても、スターサンダーは羞恥と情けなさに身を凍らした。

「あああああ、かかっているわ!! みんなかかっている!! あひいひい、なんてことを!! おおっ、はっおおううう!! イクッッ!!」

「どれほどみじめな恥辱を味わおうとも、異常な肉悦の堂々流りを止めることはできない、身体がコントロールを離れて絶頂の暴走をしている。」

「イクッッ!! あっやああ、止まらない!! イクッッ!! おっおおほほう、狂っちゃっう!! お尻がイキ狂っちゃっうッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

「イクッッッ!!」

サンダー・クラブス1リボン ビースキーパー

「いいぞ、レイ。また一段と乳奴隷化が進んだな。バドリスが軽快に笑い、黒熊糞で異母妹の汗に濡れた尻肉を打ち握えた。スターサンダーは新たな鋭い刺激を受けて、ただ尻をうねうねと揺らし、肛門と膣口から蜜をあふれさせるのみだった。

スターサンダーは母の友を見つめ返す。
「わたくしが、サンダークワックスが、梨花さんを救出するわ。美田さんも、環奈さんも救出して、地球へ帰りますよ。地球以外の惑星でも、この宇宙入隊ミッションでも、梨花さんたちが行きたいところへお連れするわ。母に会いたいのならば、シャウナも行くわ。」

「はっ！」
密着する二人の足もこの床に、二人の剣が突き出た。両刃の細身の剣だ。
反射的に身体を離して、剣が飛んできた先に顔を向ける。
「な、なんなの……？」

スターサンダーは愕然として、視線の先にいる人物を見つめる。
バドリスが今まで着ていたシャラジャフした軍服風衣装を脱ぎ、全裸になっていた。両手を腰に置いて、誇らしげに胸を張っている。

スターサンダーが最後に異母兄の裸身を見たのは、子供のころのプールだった。そのときのバドリスはトランス型の水着を穿いて、体格は薄せてもいないし、たくましくもない、ごく平均的な年代の少年の身体だった。
現在、目の前では堂々と全裸身をさらしているバドリスは、胸中の表情筋を駆使して目隠している。地球でいうとマヤ顔だ。

確かに素晴らしい肉体美だった。力強く引きしまった筋肉は、実践的に鍛え上げたアスリートや武術家のもの。股間からまっすぐにそそり勃つ男根も、発達した大胸筋や背筋、大腕筋や大腿筋に比べて遜色のない立派なサイズ。
とはいえスターサンダーが知るバドリスは、地道に鍛錬を積むような性格ではない。

「肉体強化処理を受けて造った身体ね。見栄っ張りバドリスさんにはふさわしいわ」
「合理的と表現する。手軽に強くなるのに、何年も努力するほどの量の骨頂だ。そもそもレイの電撃こそ、なんの努力もしていないで手に入れた生まれつきのミュータント能力だろうが」

スターサンダーが生まれつき持つしまった能力を制御するまでに、どれほど苦闘したのかを、バドリスは見ていた。しかし、自分の中でなかったことにしているのだろう。
スターサンダーは笑った。バドリスが男性器を尻も丸出しのくせに、顔には太陽をシミュル化したシールを貼っている。惑星シャウナ全体が統一国家になる前に、オルガがある地域を支配した国の紋章だ。

バドリス兄さんは古代シャウナの国家代表の剣闘士のコスプレをしている。国家剣闘士が紋章以外にはなにも身につけないのは事実だけど、あの太陽の紋章が使われていた時代には、とくに国家剣闘士なんて存在しなかった。歴史がデータマタわ」

バドリスが右手を前に出すと、床に穴が開き、抜き身の剣が柄を上に突き出した。凝った造形の柄を右手で握ると、恰好をつけて高速で剣の刃を披露する。
「レイと梨花も剣を取れ。梨花の得意な見世物ややるぞ」

「バドリス御主人様のおままだまに、悦んでお受けいたします」
梨花が剣を引き抜き、右手で構えた。女教師スタイルとはミスマッチだが、身体の動きは剣と一体になったように美しく決まっている。

「なかなかに上手になつてきているだろう。梨花は惑星ソーソズの工口闘技場で闘う北紋章として活躍していた。そうだな」
「仰る通りです。様々なスタイルで闘ってきました」

顔を梨花の胸の上の大きな月を見上げて、何光年も彼方を見据えるかす。表情が潤み、手にした剣を淫兵のようにあつかい、刃の側面を白いブラウスを持ち上げるハストに連ねる。
「はあああ、女教師同士で闘い、勝利すれば相手ペニスバンドで犯して、ああ、何時間もよがらせました。はっんんん……敗北すれば、わたしがペニスバンドで犯され、前の北穴も、後ろの尻穴も、たっぷりイカされました……」

剣をぐるりと回して、柄の後端をスカートの下腹部に押しつけ、布の上で刃を描く。
「……あひ、ふうんん、男の闘士とも闘いました。勝てば、闘士を跪かせて、口でわたしの女性器と肛門に奉仕させ、おしっこを浴びせて、飲ませてやりました……おおう、わたしが負ければ、何人もの男に輪姦されました。身体中に肉棒を押しつけられて、全身に精液をすりこまれて、吐くほど飲まれました。ああああ……」

柄を布が被れる勢いで股間部分に突き入れて、尻を妖しく揺らす。スカートから伸びる両腿がカクカクと震えて、ブラウスの影のみが大きく弾んだ。
梨花の淫靡な剣舞を前にして、バドリスが勃起を隠し立てた。

「レイも剣を取って、俺と闘え！ 真のシャウナ人の男の強さを叩きこんでやる！」
スターサンダーが剣を取る前に、梨花が前へ跳び出した。

「わたしが先に参ります」
梨花もまたワーストフォームに寄生されて、身体を強化されている。そのスピードはオリンピック中継で見る各国代表のフェンシング選手を超えていた。しかもますますに凄まじい。足を巧みに使い、トリッキーな動きでバドリスの右側面から切りかかった。ついさっきまで自動をしていたと聞えない動きだ。

「はあはあ」
と、上から自爆の声を発してバドリスが身をひねり、右手の剣で梨花の一撃を跳ね飛ばした。

「おのれ！」
梨花はバドリスの周囲を軽快に駆けまわり、まさに蝶のように舞い、蜂のように刺す攻撃を、凄まじい速度で連続させている。そのすべてを目で追うことは、スターサンダーには不可能だ。

攻撃のすべてを、バドリスが軽々とかわし、避けて受け流し、弾き飛ばす。剣と剣が何度もぶつかる金属音がリスミカルに響き、バドリスの腰の前で輪姦が右に左に華麗なダンスを踊る。
やがてスターサンダーは笑ってしまっただ。

「八百屋だわ！」
単純な筋力なら、バドリスが優っているかもしれない。しかし動きは梨花のほうが上だ。とれほど闘技場で闘いを重ねたのか知れないが、梨花の剣技は地球の剣闘士のスーパーヒーローに優るとも劣らない。

「梨花さんは、バドリス兄さんを斬ろうと思えば斬れるわ。わざと避けられるように、剣で受けられるように、計算して攻撃している。あつー」

「第二次変異？」
「はい、黒い宇宙です。」

「幼い、オルは主治医にたすねた。」

「ようやく自分のミニータン卜能力を無事でコントロールできるまじりになり、定期検診を受けているときに、医者が言った。主治医は魅力的な笑顔で、面談の場で説明してくれた。ミニータン能力は不安定で、自由にコントロールできるようなつたと覚えても、なにかのきっかけで能力が変化することがある。たとえば以前に診たミニータンの患者は、大人になつてからある寄生虫が体内に入ったことがきっかけで、能力が大きく変化して、悪大な被害を出す暴走者になってしまうという。親身に見守つてくれた主治医への深い恋心ととも、幼き日の記憶を、スターサンダーは思い起こしていた。

「今まで自分が身体から発する電気は、どこから来ているのか、自分でもわからなかった。やっとわかった。この宇宙とは別の次元のエネルギーの一部が、自分の身体を通して電気として現れていた。」

「今は、電気以外の未知なるエネルギーも呼べる。」
床に横たわる身体から漆黒の稲妻が何本も放たれ、広い室内を駆け回り、反転して、爆物を狙う未知なる半宙生物のごとくバドリスに集中する。北極線の突然の異変に、剣を持ったまま呆然としている全裸男が黒い稲妻に襲われた。

「わあああッ！」
バドリスが数メートルも跳ね飛ばされ、床に叩きつけられて、ころころと転がった。全裸の皮膚の三分の二以上が、石油に汚染された油黒みたいにねっとりした黒色に染まりていじ。

「な、なんなんだ、これは……」
黒ずんだ喉と顔からこぼれる血は、か細く滲み出ている。立ち上がりようとしても、黒くなった筋肉に力が入らない。そして猛烈に寒い。まるで雷が氷の塊に包まれて冷えきっているように、身体が力子力子に硬くなって、まともに動かせなかった。このまま凍死するのではないかと恐ろしくなる。

「なにが、起きてんだ……」
視界に近づいてくる異母妹の姿が入った。今も全身から放たれる黒い稲妻が、蛇の群れのように周囲の空気をうねり、シャウナの神話に伝わる醜黒の母神ユーリスのようにおどろおどろしい。バドリスは幼いころに、毒入蛇の群れを脅威とする醜黒母神の恐怖譚を聞かされて、夜のトイレに行けずに、何度もおねじをした。

「だ、どうして、力を使える……俺が、電気を、消しているのに……」
シャウナの数々の書物のイラストに描かれるユーリスそっくりの、スターサンダーは黒い稲妻の本を右手にまどわりつかせて、見る者を恐怖させる冷やかな怒りを浮かべた。

「わたくしが出しているのは電気ではないわ。なんだと聞かれを困るけれど、異次元宇宙から来る未知のエネルギーよ。あなたが同時に三匹ものワーストームを寄生させたから、セカンドモディファイケーションを起こして、こんなことができるようになった。おそく、あなたはほらくまも動けないわね。」

「あなたじゃない！ バドリス兄さんと呼べ！」
スターサンダーは憤怒に激えながら、表情はいつそう冷たくなつていく。

「ああ、わたくしは三匹の寄生生物のせいで、おかしくなつていては違いはないわ、スーパーヒーローなのに、この手でもまえを殺したくて仕方がない！」
「バドリス兄さんと呼べええッ！」

「くああああッ、シムニー、プランBだ！」
「どんなふうに卒業されたいのかしら、ええ、「ニコラス野郎」」

「くああああッ、シムニー、プランBだ！」
バドリスのわめき声に響いて、床のあちこちに穴が開き、多数の「コソコソ」したシルエツトがせり上がつてく。

「こんなもんで用意していたんか！」
スターサンダーは急構え、黒い稲妻を身体周囲にめぐらせた。

「五十体の集団で包囲したのは、悪さなら三ノミストル赤りの見慣れたロボットだ。銀河でも有名なメカカの戦闘用ロボットで、シャウナの監獄や軍陣でも多数採用されていた。別の監獄での戦争を伝えるニュースでも、塗染が遠うだけの同じロボット同士が戦つてい

る。」
威圧感を与えるために絶妙にデザインされた武器な姿の両腕が、様々なタイプの武器を構えた。

「未聞人をぶっ殺せ！」
バドリスの命令一下、銃口からいっせいにエネルギーや銃弾が放たれる。

だがスターサンダーの周囲に響く黒い稲妻に触れたエネルギーはすべて露散霧消した。銃弾も残らずバードを失い、床に落下してバラバラと壊れるような音をたてる。

スターサンダーは自分の意志の通りに動く黒い稲妻がしていることを理解した。

「触れたものからエネルギーを奪い取り、異次元へと送っているのね。銃弾が止まって落ちたのも、運動エネルギーを奪っているからだよ。でもバドリスの身体が黒くなったのは、どうしてかしら？」

「ロボットたちは、バドリスと違って恐怖を知らなかった。しかしターゲットが使う未知の武器を前にして、人工知能が判断を下せないでいる。」

「そのわずかな隙に、スターサンダーは防脚に使っていた黒い稲妻を解放した。黒い稲妻の群れが戦闘ロボットたちの間を飛びまわり、次々とエネルギーを吸いつくす。自分の肉體を通して、エネルギーが別の宇宙へと転送されていくのを、不思議な心地よさで感じてくる。」

「特殊合金の脚体が黒く染まり、ロボットの巨腕が機能を停止して、次々と転倒した。やすやすと戦闘ロボット集団を全滅させた後に、スターサンダーは肩をひそめる。」

「これがプランBなの？」
バドリスが黒く染まった顔を痛々しく引きつらせた。笑い顔を作っているようだ。

るだけになった。

「あのときは助かったけれど、正直なところ、あんな正体不明のわけのわからない力はいらさない、なくなつてポツとしているわ」と、いつの本人の秘話。

美里たち三人はいつた日本へ下り、遠くから年節を重ねた集族を見た。これまでの体験を考えると、再会する気持ちにはなれなかった。

不幸な形だつたとはいえず、宇田を巡つて生きてきたたちは、今さら別人のかりをして地球にとどまるのは窮屈だと言ひ、あらためて宇田へ旅立つていった。まずはシャナへ行き、車笑に会うつもりだ。

こうして宇田からの情報があつたことは地球人には隠されたまま、事件は収束したのである。

そして千葉県庁舎の前で、記者会見が開かれた。

死から甦還したリリー・ダイナモのお披露目だ。

おなじみのかわいひヒーローコスチュームのリリー・ダイナモの後ろには、後見人という様子がキャプテン・スカイの長身が立つて

いる。

キャプテンは日本最初のスーパーヒーロー・ジャスティスサーカスの創設者であり、長年第一線で活躍してきた。ある事件でオビ

ート能力を失ひ、現役を引退したが、今も日本のヒーローたちの精神的指導者として活動している。

リリー・ダイナモは多数の報道陣や一般の人々を前に語つた。

「皆さんもご存知の通り、わたしは不覚を取り、散北して、致命傷を受けました。自分でも死んだと思ひました。ですが、わたし自身も自覚していなかったオビート能力が発動して、仮死状態になつて生命を守ることができました。

仮死状態のわたしは、ジャスティスサーカス本部で蘇生しました。とはいえず活動できるまでは長いリハビリを必要としたので、自分とわたしの関係者の身を慮るために死を偽装したまま、ジャスティスサーカス本部で訓練して、ようやくもつてきました。

ご心配をかけて、申し訳ありません。

会見に集まつた大勢の人々の隣に、サンダークラップスの四人が笑顔で混じつていた。

ベルは双眼鏡を目に当て、小声で囁いた。

「また嘘をつかなくちゃならないとは、スーパーヒーローは難儀だねえ」

リリー・ダイナモの言葉を真剣に聞いている輝と静子は、無言でうなずく。

「やっぱり秘密の正体は隠らなくてはね」

輝は自分のためならいる車椅子の女性にそつと手をかけ、千葉市内のごく普通の家で初対面したリリー・ダイナモの笑顔に驚いたと手を思ひ起した。

リリー・ダイナモの本名は百合丘知葉。

高校生のときに事故で下半身不随になり、車椅子が必要になつた二十代の女性だつた。

知葉は偶然、閉じた異空間に封印されていた宇田人の住居らしき遺跡を発見した。その遺跡にあつた情報通信機を通して、月の軌道に隠されていた無人の宇宙船と通信ができた。宇宙船は西暦の十六世紀ごろに地球に来て、乗員たちが今の千葉奥に住居を築いたが、数年で放置されたらしい。宇田人がいなくなつた理由は、知葉にもわからない。

通信機の特長システムを作動させると、宇宙船に多数保管されているバイオテクノロジーで造られた意志のない生体ロボットが、一瞬で転送されてくる。知葉は精神を生体ロボットにリンクさせて、離れた場所からリモートコントロールができる。

リリー・ダイナモは、車椅子の若い女性が精神リンクで動かすロボットだつた。死体を警察が検視しても、普通の人間と判断したほど精巧な。

自分が操る生体ロボットを役立てたく、知葉はイベントで千葉に来ていたキャプテン・スカイに相談した。キャプテンから指導を受けて、スーパーヒーローのリリー・ダイナモが扮されて、知葉の身体にダメージはない。しかしロボットを通して死を体験したショックは大きく、ヒーロー活動を再開するまでには時間を要した。

記者会見の言葉はついでに、

「わたしが生きていられるのは、一度きりの奇蹟だと思つています。だからこそよりよいスーパーヒーローでありたいと決意していま

す」

拍手と歓声がどつと沸いた。

その後しばらく質疑応答をしてから、リリー・ダイナモとキャプテン・スカイはジャスティスサーカスの専用車に乗り、県庁から離れた。

車椅子の知葉が大きく息をつき、腕に笑ひかける。

「リリー・ダイナモは宇宙船に帰還されました。今は、車の中ではキャプテン・スカイだけです」

両手を膝上上げて、大きく脚筋を伸ばす。

「あああ、緊張した。」「いよいよマスクの相手をするのって、何回やつても固くなつちやう。」「サンダークラップスの四人も口々に賛同した。

輝は腕を相手、しみじみと語る。

「マスクの相手をしてあげてくれるのなら、もっと気楽なものになあ」

「静子は自分がマスクとカメラの列の前立っていたようにこわはつた顔をゆるめた。

「あたしはアーマーで全身を隠しているのに、なぜかカチカチになります。アーマーの中が冷や汗で汗でベトベトになつちやう。」「

「わたしなんて、本当の自分は別の場所にいるのよ。リリー・ダイナモの目を通して自分を見るのは、今でも変な気分」

「輝は千葉の町をながめて、ほがらかに言った。

「まあ、せつなく知葉さんたち友達になつたのだから、知葉さんのおすすめのことまで真摯にしましやう。わたたくが響るから安心してね」

「さすがは銀河のお嬢様！ 太っ腹！」

ベルの声に、全員が笑つた。

